

# 中国詩跡補考

植 木 久 行

●本稿所収「詩跡」項目表

- (1) 漢長安城
- (2) 三良墓
- (3) 雲岡石窟
- (4) 恒山
- (5) 竜門
- (6) 趵突泉
- (7) 蓬萊閣
- (8) 徂徠山
- (9) 安樂窩・独樂園
- (10) 州橋
- (11) 杜甫墓
- (12) 杜甫故里
- (13) 石淙
- (14) 滄浪亭
- (15) 瘦西湖
- (16) 岳飛墓
- (17) 岳麓山
- (18) 李白故里
- (19) 三蘇祠
- (20) 嘉峪関
- (21) 敦煌・莫高窟
- (22) 麦積山
- (23) 火焰山
- (24) 龜兹故城
- (25) 北庭故城・輪台
- (26) 黄山
- (27) 九華山
- (28) 武夷山
- (29) 泉州
- (30) 広州
- (31) 羅浮山
- (32) 滇池

## (1) 漢長安城（陝西省）

前漢の長安城は、秦の始皇帝が統一国家の首都にふさわしい都城づくりをめざして開発した渭南（渭水の南）の地を利用して、

高祖劉邦・惠帝劉盈（二代）・武帝劉徹（七代）の三代を経て、世界の中心に立つ都城としての威容を整えた。

都城のプランは、秦の都咸陽城を手本にしたとされ、城内の長樂宮・未央宮と城外の建章宮の、三大宮殿群から成る。宮殿区の造営が先行した結果、全体をかこむ城壁は不整形であった（城壁の全周は約二五キロ）。西安市の西北約三キロの地である秦の都咸陽城のほぼ真南に位置する。

都の人口は、約三十万とも約五十万ともされるが、城内の宮殿区がきわめて広いことを特徴とした。漢初に造営された長樂・未央の二大宮殿だけでも、全城の三分の一以上の面積を占め、武帝の時代に新改築された明光宮・桂宮・北宮を加えると、すでに二分の一を越えた。これらの諸宮殿は、中央以南の地に集中したため、一般の住宅地は、残る北部にかたよることになったらしい（一説に、前述の長安城は内城にすぎないとする）。

長安城内で最も壮麗な建築は、東南部の長樂宮と西南部の未央宮であり、いずれも城内で最も高い竜首原の高地にあった。長樂

宮は、高祖劉邦が政治をとった宮殿であるが、二代の恵帝以後は、もっぱら皇太后（皇帝の母）の住居とされたらしい。この中の一つ、長信宮は、成帝劉鷺のとき、才色兼備の班婕妤（婕妤）が、淫蕩な趙飛燕姉妹の毒手からのがれるために、皇太后の世話を申し出て移り住んだ場所として有名である。

失意をかこつ班婕妤は、季節の移ろいとともに捨てられる団扇のはかない運命に託して、「怨歌行」を作った。盛唐の王昌齡は、「長信秋詞」（その四）のなかで天子の訪れをひたすら待ちつつ、ひとり寂しく暮らす彼女の心境を、こつ詠んだ、「真成に薄命（な）るか）と久しく尋思す（時のたつのを忘れて思いにふける）、夢に君王に見えて 覚めて後疑ふ（真か夢かと思いまどく）」と。

他方、未央宮は、二代の恵帝以降、天子の住む皇宮となり、前漢王朝の政治の中心であった。「未央未央」の名称どおり、中国の歴史上、最も長く使用された宮殿である。長安に都を置いた北朝期にも、おおむね使用され、その後も絶えず修復された。唐の武宗の会昌元年（八四一）、未央宮を修復した記録が伝わる。

漢の長安城は、唐代、長安城の北に広がる広大な禁苑の中に、すつばり含まれた（禁苑の西部）。景龍二年（七〇八）、中宗李顯は群臣を従えてここを訪れ、宋之問や劉憲・李嶠らの詩が現存する。かつて七言詩発生の源とされた七言聯句の催しの舞台も、この未央宮内の柏梁台であった。

また建章宮は、武帝のときに造営された、「千門万户」と評される豪華な宮殿である。あまりにも巨大なため、未央宮の西の城外の地に、直接隣りあう形で造営された。宮殿内には高樓が林立して、武帝の登仙飛翔への志と、皇帝権力の神聖さを、強く印象づ

けた。この建章宮と前述の未央宮とは、城池をまたぐ輦道（皇帝が乗車のまま通行できる高架道）で結ばれ、皇帝は自由に往復できたのである。<sup>(2)</sup>

## 註

(1) 真成薄命久尋思、夢見君王覺後疑（唐詩選）

(2) 漢長安城全般に関しては、松浦友久「植木久行『長安・洛陽物語』（集英社、一九八七年）参照。

## (2) 三良墓（陝西省）

三良とは、三人の良臣の意。春秋五霸の一人、秦の穆公（嬴任好。穆公は繆公とも書く）が死んだとき（前六二一年）、殉死した一七七人の中に、子車氏（秦の大夫）の三人兄弟、奄息・仲行・鍼虎がいた。彼ら三人はいずれも有為の人材であったため、秦国の人々は「黃鳥」詩を作って、その死を哀しんだという（『左伝』文公六年の条など）。

唐の張守節『史記正義』（秦本紀所引）に見える後漢の応邵の言葉によれば、穆公は群臣との宴会の際、「生きては此の楽しみを共にし、死しては此の哀しみを共にせん」といったので、三人兄弟は承諾して殉死したのだという。かくして三人の殉死者「三良」は、秦の穆公の墳墓の近くに殉葬された。

秦の穆公の墓は、西安市の西北約一五〇キロ、鳳翔県城内の東南隅にある、高さ約六メートルの土丘とされる。『史記』秦本紀に引く初唐の『括地志』には、「秦の穆公の冢は、岐州雍県（今の

鳳翔(鳳翔)の東南二里に在り」とし、「三良の家は岐州雍(雍)一里の故城内に在り」とする。

三良墓の詩跡化は、三良の殉死を知った秦国の人々が、その墓穴に臨んで深く悲しみ、彼らを殉死させた穆公の非人道的行為を刺つて作つたという『詩経』秦風「黃鳥」詩に始まつた。詩は三章から成り、第一章にいう、「交(交)交(交)たる(小)さいさま。一説に鳴き声の形容」黃鳥は、棘に止まる。誰か穆公に従ふ、子車奄息。維此の奄息は、百夫の特(百人の夫にも匹敵するすぐれた人)。其の穴(墓穴)に臨めば、惴惴として(ぞっとするさま)其れ慄る」云々と。

三良の殉死は、家臣の「忠義心」とも密接にからみあい、殉死行為の是非、あるいは殉死命令の有無、さらには殉死者が強制されてやむなく自殺したのか、それとも自ら進んで選択した行為なのか、という論点にまで波及していった。

後漢の王粲は、「詠史詩」のなかで、三良の痛ましい死を、「古へより 死に殉(殉)ふこと無し、(これは)達人(道理に通じた人)の共に知る所なり。秦穆は 三良を殺せり、惜しい哉 空しく爾(爾)為せり」と慨嘆し、穆公の行為を強く批判しながらも、三良に対しては、「生きては百夫の雄(前掲の「百夫の特」と同意)と為り、死しては壯士の規(手本)と為る」とたたえた。

他方、魏の曹植も「三良の詩」を遺している。王粲の詩に刺激されての作らしい(王粲と曹植の二詩は、『文選』卷三十一所収)。曹植は、三良の殉死を自ら進んで選択した「忠義」の行為であるとして、積極的なたたえた、「秦穆 先づ世を下りて、三臣 皆な自ら残(残)へり。生ける時は 榮(榮)榮を等しくし、既に没しては 憂患

(憂いや患(患)し)を同じうせり。誰か謂(謂)ふ 軀(軀)を捐(捐)つること易(易)しと、身を殺すことは 誠に独(独)り難(難)し」と。そしてその死を深く悼んでいう、「涕(涙)を攬(攬)ひて 君(君)が墓(墓) 秦君穆公の墓。三良もともに眠る)に登り、穴に臨んで 天を仰(仰)ぎて歎(歎)く」と。

ほぼ同時期の阮瑀も、「誤れる哉 秦の穆公、身没して 三良を従(従)はしむ」(『芸文類聚』卷五十五)と詠む詩を遺す。

以後、東晋の陶淵明「三良を詠ず」詩は、曹植詩の立場にたち、唐の柳宗元「三良を詠ず」詩は、王粲詩の立場にたつて、三良を詠んだ。北宋の蘇軾は、「秦の穆公の墓」(鳳翔の八觀(八つ)の見どころ)のなかでいう、慈愛深い穆公が殉死させるはずはなく、三良は自ら進んで穆公の後を追つたのだ、と。

三良墓は、「殉死」という悲劇を契機として、いわば君臣関係のありかたの根本を問いかける深刻な詩跡として機能している。たとえ詩人が、その墓を直接訪れずに詠んだとしても……。

#### 註

- (1) 交友黃鳥、止于棘 誰從穆公、子車奄息。維此奄息、百夫之特。臨其穴、惴惴其慄。
- (2) 自古無殉死、達人所共知。秦穆殺三良、惜哉空爾為。…… 生為百夫雄、死為壯士規。
- (3) 秦穆先下世、三臣皆自殘。生時等榮樂、既没同憂患。誰言捐軀易、殺身誠獨難。…… 攬涕登君墓、臨穴仰天歎。
- (4) 誤哉秦穆公、身没從三良。

### (3) 雲岡石窟（山西省）

敦煌の「莫高窟」より一世紀遅れて始まる雲岡（雲岡）の石窟は、五世紀の後半、北魏の国家事業として、宗教局長官曇曜の指導のもとに強力に推進された。当時の北魏の都「平城」（大同市の西郊十五、六キロにある武州）（周）川峡谷の、そそりたつ砂岩の断崖（武州山・雲岡）を掘りぬいて造営したものである。

初期の「曇曜五窟」（西区の第十六、二十の洞）は、「彫師の奇異なること、一世に冠たり」（『魏書』積老志）と評された。いずれも高さ十数メートルにもおよび、インド風の巨大な石仏を中心とする尊像窟である。北朝では、皇帝を「生き仏」（皇帝即如来）とする仏教観が根づいていた。脚下で見あげる大仏は、仏徳に帝徳の広大無辺さを無言のうちに語りかけてくる。

この北魏最大の記念建築物は、中国最初の廃仏（仏教弾圧）を体験した後の、空前の仏教隆盛期を背景として誕生した。文成帝・献文帝・孝文帝の三代にわたって、石窟が造営され、雲岡は新しい仏教の聖地となる。

今日、主な洞窟だけでも五十三、石彫像が五万体を数える。なかでも雲岡随一の荘嚴さを誇る第六窟は、中央部に方形の柱を置く華麗な塔廟窟であり、端麗な大仏坐像を本尊とする第五窟と一対をなす。この両窟は、太和七年（四八三）ごろ、孝文帝が父親の追孝供養のために造営したものであった。

雲岡石窟を詠んだ初期の詩として注目される作品は、唐の天宝元年（七四二）ころに成る宋昱の「題石窟寺」（石窟寺に題す）である。詩の冒頭には、石窟寺の概観が、梵宇 金地に開き、香龕

鉄困を鑿つ（壮麗な仏寺が黄金の大地に造られ、諸仏を安置する香しい仏龕が、鉄困山（仏教語。鉄でできた山）のこのとき岩山の断崖に掘られた）と歌われている。

そして続く一節で、石窟内外に広がる神秘的な荘嚴さを、こう歌う、

影中群象動 影中 群象動き  
空裏衆靈飛 空裏 衆靈飛び  
簷牖籠朱旭 簷牖 朱旭を籠め  
房廊挹翠微 房廊 翠微を挹む

石窟内では、仏や菩薩などの群像が、輝く光のなかで動き、多くの神霊たちが空中を飛びかす。窟外に接して建つ殿堂の軒や窓は、朱い日ざしをあびたように色鮮やかであり、室内や廊下は、緑の山気にしっとり染まっていると。

詩は、『文苑英華』卷三四（宋版）に、「石窟寺に題す。即ち魏の孝文（帝）の置くところなり」（即ち「以下は原注である」と題され、前述の第五窟と第六窟を歌うものである。現在、この両洞の前には、清初に造られた四層の楼閣がそそりたち、昔の飛檐・重楼（高層建築）の面影を伝えている（この「石仏寺」が、雲岡石窟参観の正門入口となる）。

ただ雲岡石窟は、中国北部の塞外に位置し、しかもこうした仏教芸術（石彫像）は、従来、詩の題材として重視されなかった。

このため、詩跡としての地位は低いが、それでも雲岡の仏教遺産に接した人々のなかに、荒廃した現状を傷む詩が生まれた。清の馮雲驥の「雲岡の寺に題す」詩などは、その一例である。有名な第二十洞の露仏も、本来石窟内にあつたものが、天井と前壁の崩



落によって露出したものである。

## 註

(1) 梵宇開金地、香龕鑿鉄圍(全唐詩二二)

## (4) 恒山(山西省)

古来、国家の鎮めとして尊崇された「五岳」の一つ、「北岳」にあたる恒山は、現在の河北省曲陽県の西北から山西省渾源県の南に延びる、百数十キロの高峻な山脈の名である。塞北の第一山とも俗称される恒山は、一時期、前漢の文帝劉恒の諱を避けて、「恒」と同意の「常山」の名を用いた。大茂山の別名もある。

初唐の李季ら『括地志』巻二(賀次君『輯考』本)に、「恒山は定州恒陽県(今の曲陽県)の西北百四十里(約七十八キロ)に在り」といふ。これは、現在、恒山の主峰と目される「天峰嶺」(海拔二〇一七メートル、渾源県城の南約六キロ)付近から五十キロ以上も東南方向に離れている(今日いう恒山の範囲とは、伸びる方向も異なる)。

北岳恒山の祭祀は、漢代以降、明代以前に到る間は、ほぼ定州曲陽県(恒山の東南端)で行われていたが、清初、大同府渾源州(恒山の西北端)に変更された。これは、塞外の恒山が、中原(黄河中流域)政権の領域外になったり、元代、北京に遷都して以降、従来の曲陽の地は、北京の西南に位置して、北岳の呼称にそぐわなくなったこととも関連する。

今日の恒山(渾源県の南、恒山の西北端)を北岳と呼ぶように

なったのも、明代に始まり、清代に定着した。詳しくは、安塞・徳斌「北岳恒山」(『五岳史話』中華書局、一九八二年所収)等参照。

従つて「神よ 安くに在りや、永く我が王国を康らかにせよ」と歌い収める唐の賈島「北岳廟」詩は、曲陽の地の北岳廟(宋・元以後のものが現存)を詠んだものと考えてよい。詩の一節には、恒山の幽深な神秘性が、こう歌われている。

巖巒疊万重 巖巒 万重を疊ね

詭怪浩難測 詭怪 浩として測り難し

はてしなく豊なりあう険しい岩山、その奇怪な不可思議さは、まことに測り知れぬと。ちなみに、明代(十六世紀初め)、渾源の主峰「天峰嶺」南面の中腹にも、朝殿(北岳廟)が造営された(現存)。

恒山は塞北に位置していたため、詩跡として定着するのが遅れ、ほぼ明・清期であった(清の乾隆二十八年重刻『恒山志』(山西人民出版社、一九八六年)参照)。恒山第一の絶景は、空中の楼閣のような「懸空寺」である。その名(空に懸かる)のように、主峰「天峰嶺」を前に望む翠屏山の、断崖絶壁上に張りつくように造られていた。この「天下の巨觀」(明末の旅行家徐霞客の語)を目のあたりにした明の王湛初は、「遊懸空寺」(懸空寺に遊ぶ)詩のなかで、「誰か鑿つ 高山の石の壁」を、虚を凌いで(天空高く)梵宮(寺院)を構ふ」と詠んだ後、こう歌つ、

層樓疑海上 層樓 海上かと疑ひ

鳥道没雲中 鳥道 雲中に没す

梵宮は、まるで海上に出現する層気楼のよう、鳥しか通えぬ険



しい絶壁に鑿たれて、雲のなかに没んでいる。寺は北魏後期の創建とされ、今もなお観光の名所である。

### 註

(1) 神今安在哉、永康我王国(全唐詩五七一)

(2) 誰鑿高山石、凌虛構梵宮(恒山志)山西人民出版社、一九八六年  
一九五頁)

### (5) 竜門(山西省)

山西省と陝西省との間を切り裂く晋陝峡谷に入った黄河は、黄濁の激流と化し、西岳「華山」に向かつて一気に南下する。その晋陝峡谷の終点(汾河のそそぎ口付近)に、黄河第一の険とされる難所「竜門」があった。山西省河津市の西北約十二キロ(陝西省韓城市の東北約二十五キロ)に位置する山の名(竜門山)である。

古代、黄河の奔流は、この竜門山に激突して、天空にまでみなぎる大洪水を引き起こしていた。この惨状を見かねた堯帝の命を受けた禹(夏王朝の始祖)は、竜門山を開鑿して治水に成功したという。北魏の酈道元『水経注』巻四には、「大禹(偉大な禹)の鑿つ所……広さ八十歩、巖際(岩上)に鑄の跡あり」とあり、ほとりに、禹を祭る廟「大禹祠(大禹廟)」が歴代置かれてきた。この伝説から、竜門は「禹門」ともいつ。また「竜門口」「禹門口」と呼ぶのは、ここが黄河の渡口(渡し場)でもあったためである。

竜門は、「登竜門」の故事で名高い。鱣(鮪)ともいい、本来、チヨウザメを指すが、古くは鯉の一種と誤解されていた)は、晩春三月になると、黄河を溯って竜門を渡ろうとした。「渡るを得れば、竜と為る」といつ(『水経注』巻四)。また辛氏『三秦記』(『元和郡県図志』巻十二所引)には、「河津は、一に竜門と名づく。水陸(険?)通ぜず、魚鼈(魚やすつばん)の属ひは、能く上る」と莫し。江海の大魚の、竜門の下に集まるもの数千、上るを得ず。上れば則ち竜と為る」といつ。つまり竜門の「竜」は、この伝説にちなみ、「門」は、両岸の絶壁が門のように見えるための命名である。

後漢の名流の士、李膺は、軽々しく人と会わなかつた。彼のところに出入りを許された者は、魚にたとえて「竜門に登る」といつた(『後漢書』党錮列伝(李膺伝)。これ以降「登竜門」といつ語は、名士の引き立てを受けたり、出世の糸口をつかむことをいい、唐代では、最難関の「進士科」(高等文官資格試験)に及第することを指した。

こうして竜門は、禹の治水、急流の景観、登竜門にちなむ詩跡となる。晩唐の許渾は、「晚登竜門驛樓(晩に竜門の驛樓(宿駅の高樓)に登る)」詩のなかで、壮大な景色を、こう歌つ、

青嶂遠分從地斷 青嶂遠く分かれて 地より断たれ

洪流高瀉自天來 洪流高く瀉きて 天より来る

青い嶂(竜門山)は、地表から引き裂かれて遠かに対峙する絶壁となり、その間を滔々と流れる黄河の奔流は、まるで大空から流れ下るかのようだ。と。

そして「魚、竜と化す」伝説を歌つたのち、知遇者を欠くわが



身の不遇感を嘆く、「心に膺門(李膺の登竜門の故事)に感じて身ら此に過り、晩山(夕暮れの山)の秋樹(のもと) 独り徘徊す(さまよつ)と。」

詩跡「竜門」は、以後も歌いつがれる。明の薛瑄「禹門」詩は、まず黄河の奔流を歌い、次のように歌い収めた。

更欲登臨窮勝景 更に登臨して勝景を窮めんと欲するも  
却愁咫尺会風雷 却つて愁ふ 咫尺に 風雷に会ふを

さらに高みに登つて竜門の絶景を一望のもとに見きわめたく思う一方、また心配にもなる、荒れ狂う風や雷のような怒涛の音が、間近に迫りくるのが と。おそらく結句は、激動する国家の行く末に対する作者の憂慮をも内在していよう。

### 註

- (1) 全唐詩五三四。
- (2) (1)と同じ。心感膺門身過此、晩山秋樹独徘徊。
- (3) 詠晋詩選一五〇頁(姚奠中主編、山西人民出版社、一九八〇年)

### (6) 趵突泉(山東省)

泉城(泉の城)と呼ばれる済南市(省都)は、南郊外の石灰岩の山地を水源とする豊かな伏流水にめぐまれ、清らかな泉が市内のあちこちで湧きでている。北宋の曾鞏は、「齊(済南)は甘泉多く、天下に冠たり」(齊州二堂記)とたたえ、十二世紀の金代以後、七十二泉と総称される。

現在の四大泉群は、趵突泉・黒虎泉・珍珠泉・五竜潭であるが、

なかでも趵突泉こそ、七十二泉の第一であった。趵突とは、ぶくぶくと勢いよく噴出する水音の擬声語であろう。別名は檻泉(盛んに湧き出る泉の意)、『詩経』大雅「瞻仰」詩にも「つづく」・爆流(泉)。「済南の名泉は七十二、爆流を上(第一)と為す」とは、『大明一統志』卷二十二の説である。

市内の西南に位置する趵突泉は、濼水の水源であり、早くも北魏の酈道元『水経注』卷八のなかに、「泉源は上奮(噴出)し、水の涌くこと 輪のごとし」と記されている。趵突泉の名の初出は、当地の知事に着任した著名な文章家曾鞏の詩文らしい。熙寧六年(一〇七三)に成る「齊州二堂記」の中に、「泉有りて湧き出で、高さは或いは数尺(一尺は約三〇センチ)に至り、その旁らの人これを名づけて『趵突之泉』と曰ふ」とある。彼はまた「趵突泉」詩をも作り、「已に覚ゆ 路傍を行けば(くつきりと姿を映して)鑑に似たるを、最も憐む(愛する) 沙際に湧いて輪のごときを」と歌う。

北宋時代、この名泉は趙抃や蘇轍らによっても詠まれ、しだいに著名な詩跡となる。なかでも名篇として知られる元の趙孟頫「趵突泉」の一節には、この名泉の奇景が、済南を代表する二つの名勝とともに、こう歌われている。

雲霧潤蒸華不注 雲霧の潤ひは蒸す 華不注  
波濤声震大明湖 波濤の声は震はす 大明湖

泉から盛んに立ちのぼる雲霧の潤いは、市の東北約七キロの名山(華不注山)をしつとりとつみこみ、噴出する激しい水音は、(市内西北部の秀麗な湖)大明湖さえも震わすほど と。

現在、趵突泉付近は、美しい公園となる。泉群の一つ、漱玉泉



のあたりは、かつて宋の女流詞人李清照の旧居があったところとされる。また公園内の東南区の滄園は、わが国で愛読された『唐詩選』の编者？、明の著名な詩人李攀竜が、若いころ読書した場所と伝えている。

### 註

- (1) 已覚路傍行似鑑、最憐沙際涌如輪（南豊先生元豊類集七）  
(2) 詠魯詩選注七十五頁（山東社会科学院語言文学研究所主編 山東人民出版社、一九八三年）

### (7) 蓬萊閣（山東省）

渤海湾にのぞむ山東半島の北端に位置する蓬萊市、その北約一キロの丹崖山の頂きにある眺望絶佳の樓閣（高さ十五メートル）の名。登州蓬萊県の名は、昔、前漢の武帝がここから海中の蓬萊山（東海中の三仙山の一）を望めたための命名という（『太平寰宇記』卷二十）。この伝承は、より古く秦の始皇帝が仙薬を求めた話にも連なる。これは、ここが「海市蜃楼」、いわゆる蜃気楼の奇観で有名な場所だったためでもある。

北宋の蘇軾は元豊八年（一〇八五）の冬、登州の知事となったが、わずか五日後には中央に呼びもとされることになった。ぜひともこの奇観を見たく海神（竜王）に祈願したところ、通常は現れがたい冬なのに、翌日見ることができた（蜃気楼の発生は一般に春と夏）。その感激を「海市」詩の中で、こう歌った。

重楼翠阜出霜晓 重楼 翠阜 霜晓 に出で

異事驚倒百歲翁 異事 百歲の翁を驚倒せしむ

重なりあう高樓と翠の台地が、霜おく冬（の海上）に出現した。この意外な事態に、百歳の老人さえも驚きあきれる始末 と。

蓬萊閣の創建は北宋時代である。元の于欽「齊乘」巻五には、「本と海神廟の基（土台）。宋の治平中（一〇六四 六七）、郡守の朱処約、その地太だ高峻なるを以て、廟を移し、西のかた平地に置き、此に（蓬萊）閣を建つ。実に山海登眺の勝概（景勝地）為り。…… 古今の題詠甚だ多し」と記す。

ただ創建者である朱処約の「蓬萊閣記」（于国俊ほか選注『蓬萊歷代詩文選』山東人民出版社、一九八六年所収）によれば、創建は嘉祐六年（一〇六一）、この地こそ「治世（秦平の世）の蓬萊（仙境）なり」の意味をこめて命名したものである。『齊乘』の「治平」は、嘉祐に訂正すべきであろう。

北宋の趙抃は「孔憲の蓬萊閣に次韻す」詩の中で、「山巔の危構（山頂の高樓）は（神仙の島）蓬萊に傍ひ、水閣 風長かにして此は快きかな」と絶讃する。また清の甘国璧「蓬萊閣に登る」詩にも、樓中の快適な涼しさが、「面を撲つ涼風は 天外より至り、人に宜しき爽気は、座中に浮かぶ」と詠まれている。

ちなみに、現存する蓬萊閣のそばには、竜王宮、三清殿、呂祖殿、蘇公祠などの建物がある。

### 註

- (1) 蘇軾詩集二六（孔凡礼点校、中華書局、一九八二年）  
(2) 趙抃「次韻孔憲蓬萊閣」山巔危構傍蓬萊、水閣風長此快哉（清獻詩鈔（宋詩鈔））



(3) 甘国壁「登蓬萊閣」 撲面涼風天外至、宜人爽氣座中浮（蓬萊歴代詩文選（山東人民出版社、一九八六年）九十九頁）

(8) 徂徠山（山東省）

齊魯の地（山東省）を代表する聖なる山、泰山の東南に位置する、海拔一〇二七メートルの名山の名。泰安市街をはさんで斜めに対峙し、徂來山とも書き、尤萊山ともいう。古来、美しい松の茂る山であり、『水経注』巻二十四、『詩経』魯頌「閟宮」の中に「徂來の松」と歌われて以後、棟や梁の材を生む大山のイメージをもつ。

徂徠山はまた、唐の李白が孔巢父・韓準らとともに隠棲して沈飲（酒びたり）の日々をすごし、「竹溪の六逸（六人の隠者）」と呼ばれたところである。そして天宝四載（七四五）、李白は「魯郡東石門送杜二甫」（魯郡（兗州市）の東の石門（泗水の石堤）にて杜二甫を送る）詩の中で、年下の友人杜甫との永遠の別れとなる場面を、こう歌った。

秋波落泗水 秋波 泗水に落ち

海色明徂徠 海色 徂徠に明らかなり

秋の澄んだ川波が、水かさの落ちた泗水（山東省中部の川）の水面に低くゆれ、はるかな東海の輝きが、徂徠山の姿を明るく浮きたたせると。

徂徠山下は、北宋の剛直な思想家石介が一時隠棲して、人間形成を重視する教育を行ない、徂徠先生と尊称されたところでもある。清初の王士禛は、「徂徠山下の田家（農家）」という詩の中で、

清幽な自然を、「空翠の裏（緑したたる山気の中））を行き行けば、明晦 更に姿多し（急に明るくなったり晦ったりして、景色はいっそう豊かな表情を見せる）」とたたえ、将来、当地に帰隠したい願望を、表白する。さらに「徂徠懷古二首」を作り、李白や孔巢父、そして石介の生き方を追慕した。

註

- (1) 徂來之松。
- (2) 全唐詩一七六。
- (3) 王士禛「徂徠山下田家」行行空翠裏、明晦更多姿（漁洋山人精華録六）

(9) 安樂窩・独樂園（河南省）

北宋の西京「河南府」（今の洛陽市）は、高い学術文化と美しい庭園に彩られた閑静な副都であった。安樂窩とは、壮大な無限循環の歴史哲学を作りあげた特異な思想家邵雍（康節先生）が、たび重なる仕官の要請を拒絶して、市井の一隠者として暮らした住居の名である（窩は穴・巢の意）。洛陽第一の名勝「天津橋」の南に位置する、尚善坊内の東にあった（植木久行「洛都の名刹」天宮寺）をめぐって 邵雍「安樂窩 位置再考」 「東方」七四（一九八七年五月号）参照。現在の洛河（洛水）南岸の安樂（窩）村付近である（ここには、邵雍祠が建つ）。

北宋の嘉祐七年（一〇六二）、河南府尹の王宣徽は、邵雍のために、五代の節度使安審琦の旧宅あとに、廢屋材を利用した三十間



の家屋を作つてあげた。邵雍は、この家を安楽窩と名づけ、安楽先生と自称する。後にその敷地が売りに出されると、今度は邵雍の高潔な人格と深い学識を敬愛する司馬光や富弼らが、お金を集めて貧しい彼に買ひ与えた。邵雍はこの安楽窩のなかで、生きる歓びと、巨視的な史観に支えられた泰平意識を歌いあげる。彼の「閑適の吟」にいう、「春には洛城の花(牡丹)を看、秋には天津の月を翫つ。夏には嵩岑(嵩山の岑)の風に(襟を)披き、冬には菴山(南郊の菴門山)の雪を賞つ」と。

また彼の「懶起吟(起くるに懶きの吟)」「安楽窩」とも題する(には、悠悠自適の一こまが、こつ歌われている。

半記不記夢覚後 半ば記し 記せざるは 夢覚めし後

似愁無愁情倦時 愁ひに似て 愁ひ無きは 情倦めし時

擁衾側臥未炊起 衾を擁して側臥し 未だ起くるを炊はず

簾外落花撩乱飛 簾外の落花 撩乱として飛ぶ

いくらかおぼえているようでもあり、全くおぼえていないようでもあるのは、ふとまどろんだ夢からさめた直後。悲しいようでもあり、悲しくないようでもあるのは、ものうい倦怠感が胸中にひろがる時。かけぶとんをかぶり、横むきに寝たまま、まだ起きたくない。すだれの外では、はらはらと散りゆく花びらが、春風につて乱れ飛んでいる。

「天下の名園 洛陽を重んず」とは、邵雍「春遊」詩中の言葉である。花の王「牡丹」に彩られた洛陽の名園は、伊水の清流を引き入れた城内の東南部(洛水の南)に集中し、唐代後半の庭園を踏襲・発展させたものが多かった。その中で最も簡素と評されたのが、王安石の新法に強く反対して、洛陽に閑職を得て移り住ん

だ名臣司馬光の住む私宅の庭園「独樂園」である。唐代、白居易の住んだ履道里の西北隣「尊賢坊」内の北にあった(洛河の南の軍屯村付近)。

独樂園は、読書堂・釣魚庵・采藥圃・見山堂・弄水軒・種竹齋・澆花亭から成り、司馬光みずから「独樂園の記」を書いて、閑居する日常をこつ記す。「迂叟(司馬光自身の号)、平日多く堂中に処りて書を読む。……志倦み体疲るれば、則ち竿を投じて魚を取り、衿(着物のすそ)を執つて薬(薬草)を採り、渠を決して(水路を切り開いて)花に灌ぎ、斧を操つて竹を刮き、熱(熱い手)を濯つて水を盥ぎ、高きに臨んで目を縦にす。逍遥徜徉(目的もなくそぞろ歩くこと)、惟だ意の適ふ所のままなり。明月時に至り、清風自ら来る。行くも牽く所無く、止まるも扼むる所無し(独立独歩のさま)」と。

北宋第一の文人蘇軾は、「司馬君実(君実は司馬光の字)の独樂園(一〇七七年の作) 詩の中で、園内の風光と彼の暮らしぶりを、こつ歌う、「青山 屋上に在り(見え)、流水(伊水の清流) 屋下に在り。中に五畝の園(庭園) 有りて、花竹秀でて野なり(美しく茂りあつて野趣に富む)。花の香 杖履(歩く人の杖や履)を襲ひ、竹の色 蓋簪を侵す(酒杯の中に入りこむ)。樽酒 余春を楽しみ、棊局(碁をして) 長夏を消す」云々と。

司馬光自身もまた、静かな園内の様子を、「小院(小さな院) 地偏(辺鄙)にして 人到らず、滿庭の鳥迹(小鳥の足あと) 苔(青)こけに印す」「夏日西齋書事」詩と歌う。そして劉恕や范祖禹らの協力を得て、不朽の名著『資治通鑑』(編年体の歴史書)二九四巻を完成したのである。



まさに独樂園は、前述の安楽窩とともに、北宋の西京（洛陽）の卓越した学術文化を物語る場所として、必ず思い起こされる詩跡であった。

### 註

- (1) 「閑適吟」春看洛城花、秋翫天津月。夏披高岑風、冬賞龜山雪（伊川擊壤集二二）
- (2) 伊川擊壤集一〇
- (3) 「春遊」五首其四、天下名園重洛陽（伊川擊壤集二）
- (4) 青山在屋上、流水在屋下。中有五畝園、花竹秀而野。花香襲杖履、竹色侵簷翠。樽酒染餘春、棋局消長夏（蘇軾詩集一五）
- (5) 「夏日西齋書事」小院地偏人不到、滿庭鳥迹印蒼苔（溫國文正「司馬」公文集六）

## ⑩ 州 橋（河南省）

一六〇年あまり続いた北宋の都「東京・開封府」（汴京ともいう。今の開封市）は、黄河中流の華北平原に位置する。毎年「汴河」を通して江南から運びこまれる数百万石の穀物、その不断の供給によって支えられた、人口一五〇万前後をかかえる巨大な都城であった。

「大内」（宮城）、「皇城」、周五里（二・五キロ強）、唐後期の汴州城内の子城（宣武軍節度使の幕府）・内城（裏城）（旧城）、周二十里余（約十一キロ）、唐後期の汴州城の外城（羅城）・外城（新城）（国城）、周五十里余（約二十八キロ）から成り、都城の生命線たる汴河が、「内城」内を東西に貫いていた。

大内の南正門「宣徳門」・内城の南正門「朱雀門」・外城の南正門「南薰門」を結び、幅「二百余歩（約三〇〇メートル）」（南宋初めの孟元老『東京夢華録』巻二）の、南北に直進する都大路が、都城の中心街「御街」（御路）であり、春夏のころには、御溝の蓮の花や、街路樹（桃・李・梨・杏）の花に美しく彩られた（ほぼ今の中山路にあたる。）

州橋とは、「内城」内のほぼ中間、汴河に架かる、御街上の重要な橋の名である（宣徳門 州橋 朱雀門となる）。橋の東北には、名刹「相国寺」（現存）があった。州橋や相国寺付近は、都を代表する繁華街であり、とりわけ「州橋の夜市（商店の夜間営業）」は有名である。

州橋は「天漢橋」「天津橋」とも呼び、その前身は、中唐期（七八〇年代）に造られた「汴州橋」らしい。北宋の都の繁昌記『東京夢華録』巻一、河道によれば、平底船だけが下を通行できる、低く平らな石橋であった。橋脚は青石で造られ、石の梁や欄もあって、石を置ねた兩岸には、海馬・水獸・飛雲などが彫られていたという。

北宋の都、開封府城（汴京）の繁華さの象徴「州橋」は、北宋の王安石「州橋」詩によって詩跡化し、南宋の范成大「州橋」詩によって、長く忘れがたい詩跡として確立した。王安石は晩年、宰相をやめたあと、南京の鍾山（紫金山）のほとりに隠棲した。そして、かつては月光のふりそそぐ州橋のもとで汴河の水音を聞きながら、鍾山の谷川のせせらぎを切なく回想したものだ、と歌ったあと、晩年の現状をこういう。

今夜重聞旧嗚咽 今夜重ねて聞く 旧嗚咽



却看山月話州橋 却つて山月を見て 州橋を語る

今夜、昔のままにむせび泣く早瀬の音を再び聞き、山の端にかかる月をふりかえり眺めながら、今度は州橋の思い出を語っていると。詩は、複雑な心境を淡々と語りかけて、かえって深い余情に富む。

南宋の乾道六年（一一七〇）、范成大は孝宗の命を受けて、国境の淮河を越え、金国の都燕京（北京市）に赴いた。この途中、宋の旧都「開封府」にたちより、沈痛な絶唱「州橋」詩を作った。

州橋南北是天街 州橋の南北は 是れ天街

父老年年等駕回 父老は年年 駕の回るを等つ

忍淚失声詢使者 涙を忍び 声を失して 使者に詢ふ

幾時真有六軍來 幾時か真に六軍の來ること有りやと

ここ州橋の南と北は、かつて天子様の行列が通った都大路「御街」である。都だった日を知る故老たちは、毎年ひたすら天子の車駕がお帰りになるのを待ちのぞんでいる。（その彼らが）涙をこらえつつも思わず声を発して、使者たる私に問いかけた、「いつになったら、ほんとうに天子様の軍隊（南宋の軍）が来てくださるのでしょうか」と。

詩は、異民族の支配下にあつて、四十年の間、ひたすら解放を待ちのぞむ故老たちの痛切な心情を、白話的表現を用いて生き生きと代弁する。州橋こそ、北半分を占領された漢民族の、心のふるさとだったのである。

ちなみに、一九八四年、明代修復の州橋（三孔の石橋）が、相国寺の西南「中山路」の地下四・五メートルのところで見えられた。これは、黄河の氾濫にともなう大量の泥土によって地下深く

埋没したものであり、橋の長さは十五メートル、幅は三十メートルにもおよんだ。現在、この地上の中山路に、「州橋遺址」の標識が立つ。

## 註

- (1) 王安石「州橋」（臨川詩鈔）（宋詩鈔）
- (2) 范成大「州橋」（范石湖詩集）（上海古籍出版社、一九八一年）

## (11) 杜甫墓（河南省）

後世、詩聖と評される杜甫は、大曆五年（七七〇）の冬、洞庭湖にそそぐ湘江下流（もしくはその支流）の舟中で、十年を越す長い漂泊の末に病没した。いったん岳陽（湖南省岳陽市）に仮埋葬されたあと、元和八年（八一三）、孫の杜嗣業によって、杜甫の柩はようやく、先祖の眠る河南府偃師県（河南省偃師市）の墓地に改葬された（唐の元稹「唐の元稹唐の檢校工部員外郎杜君の墓係銘」）。

ところで杜甫の墓は、主なものだけでも四つ現存する。湖南省の耒陽市と平江県、河南省の偃師市と鞏義市（旧「鞏県」）の四つである。このうち、耒陽の墓は、唐・五代期、杜甫の終焉の地と伝えられた場所に設けられたものである。杜甫が洪水のために飢えに苦しんでいたとき、耒陽の県令が「牛肉（牛炙）」と「白酒」を贈ってくれ、その過食・過飲によって死んだという、有名な終焉伝説である（唐の鄭処誨『明皇雜錄』補遺、新旧『唐書』杜甫伝など）。

晩唐の羅隱は、「耒陽の杜工部の墓を經」の詩で、「紫菊の露漬よ

いかおり) 楚醪(楚の地の醪)を覆ひ、君を江畔(未水(湘水の支流)の畔り)に奠れば 雨蕭騒たり(わびしい音をたてて降る)と歌つ。

また同時期の詩僧齊己も「未陽に次りて作る」詩のなかで、「杜公の墓を經るに因りて、惆悵して(悲しみにくれて) 文章(詩)を学ぶ」と歌い、「杜工部の墳を弔ふ」詩では「域中(天下) 詩価(詩の評価)大にして、荒外 土墳卑し」と詠む。こうして未陽の墓は、四墓中で最も早く詩跡化し、後世になつても詠まれ続け(未陽には杜甫をまつる「杜公祠」もある)、四墓中ではほとんど唯一の詩跡となる。

現在、未陽の墓は、市の北一キロの「未陽市第一中学」の校内にある。しかしここは本来、終焉伝説によつて設けられたものであり、宋代にはすでに「空墳」(杜甫が溺死したと誤解した県令の建てた一種の衣冠塚)と考えられ、杜甫の真正の墓とは認めがたい(ちなみに、『全唐詩』卷二七〇に収める中唐の戎昱「未陽溪の夜行」詩「題下注「杜甫を傷む為に作る」」は、開元二十八年(七四〇)に没した張九齡の作であり、杜甫の死とは全く関係がない)。他方、平江県(湘水の支流「汨羅江」のほとり)の南十五キロの大橋郷小田村にある杜甫墓は、一説に仮埋葬された「岳陽」の墓にあたるともされるが、きわめて疑わしく(唐代の「岳陽」は、平江県の地を含まない)、清末以降、好事家によつて提出された「新説」らしい。

また杜甫の生まれた鞏県(鞏義市)の墓(市の西北七キロの康店村の北山の上にある)は、北宋の周序の作とされる「少陵(杜甫)の墓を經」(清の厲鶚『宋詩紀事』卷十)の詩に、「杜陵

の 詩客(詩人杜甫)の墓、遙かに北邙の巔きに倚る」と歌われている。この旧「鞏県」の墓は、偃師の墓から、あるいはまた岳陽(仮埋葬)の墓から、移葬されたものとされ、現存する杜甫墓のなかでは最大の規模をもつ。しかし結局のところ、ここも杜甫を記念するために造られたものらしく、二人の息子(宗文・宗武)の墓もある。

最後に残つた偃師の首陽山下の杜甫墓(鞏県墓の西十五キロ強)は、現在のところ最も信憑性が高い墳墓である。ここは、杜甫が敬愛する十三世の遠祖である西晋の名將・學者、杜預の墓のある場所であり(杜甫墓はその南〇・五キロ)、杜甫が若いとき陸渾莊を構えた、杜家代々の莊園、かつ一族の埋葬地であつた。祖父の杜審言(初唐の宮廷詩人)も、この地に埋葬されたはずである。

ただ現存の杜甫墓(偃師市の西四キロの、南北の「土樓村」(旧「土樓莊」「土樓村」の間にある)が、元種の「墓係銘」にいう「首陽の山前」の杜甫墓であるとする確証はない。当地の墓は清代以後に見えはじめ、詩の中にもほとんど詠まれない。しかし、杜甫の埋葬地が、現在の墓付近であることは疑いない。馮建國「杜甫四墓考」(『草堂』一九八七年第一期)は、参照に値する。

## 註

- (1) 羅隱「經未陽杜工部墓」紫菊馨香覆楚醪、奠君江畔雨蕭騒(全唐詩六六一)
- (2) 齊己「次未陽作」因經杜公墓、惆悵学文章(全唐詩八四三)
- (3) 齊己「弔杜工部墳」域中詩價大、荒外土墳卑(全唐詩八四三)
- (4) 周序「經少陵墓」杜陵詩客墓、遙倚北邙巔。

(12) 杜甫故里（河西省）

二大古典詩人の一人、杜甫は、唐の玄宗が即位した先天元年（七一二）河南府鞏県の瑶湾に生まれた（父は杜閑、母は崔氏）。現在の鄭州市と洛陽市のほぼ中間に位置する鞏義市の東北十キロの站街鎮（旧鞏県の県城）の南瑶湾村であり、伊洛河が大きく湾曲して黄河へとそそぐほとりであった。

杜甫は二十歳のころ、長期の漫遊に出かける前は、七十キロ西の繁華な東都洛陽に住むとき以外は、ここに住んだらしい。杜甫は七歳のときから作詩を始め、病弱と貧窮にたえながら万巻の書物を読んだという。三十歳以前の詩は、ほとんど伝わらないため、彼の幼少年期の生活も、もっぱら回想詩によってわずかに想像できただけである。

杜甫は、「壯遊」詩のなかで、「七齡（七歳）思ひ（詩想）（即ち（早くも）壯なり、口を開いて 鳳凰を詠ず」と述べ、十四、五歳のころには洛陽の文壇に出入りして、先輩から漢代の歴史家班固や文学者揚雄のようだと評されたという。「性は豪にして 業に酒を嗜み、悪を嫉みて 剛腸（剛直な腸）を懐く」（「壯遊」とは、杜甫自ら語る十代後半の姿である）。

早熟な彼にも、やんちゃな童らしい一面もあった。「百憂集行」（百憂「さまざまな心配」集まる行の意）のなかで、自らこう歌う、「憶ふ年十五 心尚ほ孩にして（幼く）、健かなること黄犢（あめ色の小牛）の如く 走り復た来る。庭前 八月 梨棗（梨と棗）熟すれば、一日に樹に上ること能く千廻なりき」と。

この鞏県の故里は、当地の県令になった曾祖父杜依藝以来のこ

とであり、祖父の杜審言（初唐の有名な宮廷詩人）も、ここで生まれた可能性がある。この故里は、清代になってようやく注目されたらしい。雍正五年（一七二七）、張漢は「詩聖故里」の碑を建て、近辺には乾隆三十一年（一七六六）に成る李天墀の「唐工部杜甫故里」（工部は杜甫の就いた検校工部員外郎の略）も建つ。

現在、当地（南瑶湾村）の筆架山下にある「杜甫誕生窰」（窰は窑洞「黄土台地に多い、冬は暖かく夏には涼しい洞窟の住居」のこと。奥ゆき十一メートル、間口三メートル、高さ二・六メートル。元・明期の修復）は、当地で昔から杜甫の誕生地と言い伝え、呼びならわしてきた「工部窰」を、一九六二年（杜甫の生誕千二百五十周年）農民李長有から買いとって整備したものである。杜甫がこの中で生まれ



杜甫誕生窰

たかどうかは、かなり疑わしいが、この付近が杜甫の故里であることは、ほぼ疑いない。詩聖杜甫をしのぶ記念物と考えればよいだろう。

註

- (1) 「壯遊」七齡思即壯、開口詠鳳凰（全唐詩二二三）
- (2) (1)と同じ。性豪業嗜酒、嫉惡懷剛腸
- (3) 「百憂集行」憶年十五心尚孩、健如黃犢走復來、庭前八月梨棗熟、一日上樹能千廻（全唐詩二一九）

### (13) 石涼（河南省）

嵩山（太室山）の東谷から流れ出て、東南麓の告成鎮のほとりで、潁河（潁水）にそそぐ谷川の名。「石涼河」「平樂澗」などともいう。特に告成鎮の東約三キロ（登封市の東南二十キロ）付近は、清澄な深い潭（車箱潭）を形成し、切りたつ断崖と怪石にかこまれた奇観として有名である。この潭付近の峰を、特に「石涼山」とも呼ぶ。

周の久視元年（七〇〇）の夏五月、則天武后は群臣を連れて避暑に訪れ、盛大な宴会の席上、みずから「石涼」詩を作つて、太子や從臣たちに唱和させた。武后の詩にいう、万仞の高き巖は日の色を蔵し、千尋の幽き澗は雲の衣に浴る」と。

唱和者の一人、狄仁傑は、「水木 幽奇多き」（後述の孟郊の詩句）風景を、「飛泉 液（しぶき）を瀧いで 恒に雨かと疑ひ、密樹（鬱蒼と茂る林の中） 涼（気）を含みて 鎮に秋に似たり」と歌う。「聖制」夏曰「石涼山に遊ぶ」に和し奉る」と。

そして李嶠・沈佺期・蘇味道・崔融ら、合計十七首の詩は、序文とともに車箱潭の北崖に刻まれ、今日もなお、良好に保存されている。これが、いわゆる「石涼（河）摩崖題詩」である（清の王昶『金石萃編』卷六十四には、「夏曰 石涼に遊ぶ詩、序を并す」として所収）。

こうして詩跡化した石涼は、後世、嵩山八景の一つとして、「石涼会飲」と呼ばれた。中唐の孟郊は、彼独特の特異な比喻を用いて「石涼十首」を詠み、詩跡として確立する（貞元九年（七九三）、四十三歳の作とされる）。「黒き草 鉄髪（黒い髪） 黒草の形容（

を濯ひ、白き苔 水銭（水のごとくきらめき、銅銭のごとくまるいさま）を浮かぶ」（その四）、「涼涼として（激流が岩にぶつかつて「涼涼」と水音をたてて） 厚軸（地軸）を覆はせ、稜稜として（兩岸の峰々は「稜稜」と鋭く切りたつて） 高冥（天空）に攢がる」（その五）、「石稜（石の鋭い稜） 玉のごとく織織たり（ほっそりと尖る）、草色 瓊（美玉）のごとく霏霏たり（美しく茂りあう）」（その六）などと歌われている。

石涼は嵩山東南麓の名勝として、以後も詩中に詠まれていく（明の袁宏道「石涼」二首など）。

#### 註

- (1) 則天武后「石涼」万仞高巖蔵日色、千尋幽澗浴雲衣（全唐詩五）
- (2) 狄仁傑「奉和聖制夏日遊石涼山」飛泉瀧液恒疑雨、密樹含涼鎮似秋（全唐詩四六）
- (3) 孟郊「石涼十首」其四、黒草濯鉄髪、白苔浮水銭（全唐詩二七五）
- (4) (3)と同じ。其五、涼涼祲厚軸、稜稜攢高冥。
- (5) (3)と同じ。其六、石稜玉織織、草色瓊霏霏。

### (14) 滄浪亭（江蘇省）

政界を失脚した北宋の詩人蘇舜欽が、慶曆五年（一〇四五）、三十八歳のとき、蘇州城内の南端中央部にあった、五代の孫承祐の池館（一説に、広陵王錢元璠の池館）の跡地を購入して整備した別荘の名である（今も三元坊の孔廟の東に現存）。

蘇舜欽の「滄浪亭記」によれば、草や木（特に竹）がこんもりと茂り、城の中とは思えない「崇き阜、広き水」が気に入って、

四万銭で購入し、水べに亭を作つて滄浪と名づけた。(ただし、現在の滄浪亭は、築山の上に移されている)。滄浪とは、屈原の作と伝える「漁父」の中の「滄浪の水」の歌(世の清濁・治乱に依じて生きる隠者の処世観を表す)にもとづく。

蘇舜欽は時おり小舟をこいで訪れ、すがすがしさに帰るのを忘れ、酒を飲み、詩を作つた。そんな折の作、「初晴遊滄浪亭」(初めて晴れ 滄浪亭に遊ぶ)詩には、

簾虚日薄花竹静 簾虚しく日薄くして 花竹静かなり

時有乳鳩相對鳴 時に乳鳩の 相ひ対して鳴く有り

簾はひっそりとして、薄日がさし、花も竹も静まりかえる。時

おり、幼い鳩がホ口ホ口と鳴きかわしている と詠まれている。春の雨あがりの朝の、おだやかな光景が印象的である(四十一歳没)。

ちなみに、滄浪亭のある蘇州市は、江南に甲(第一)たる(古典)園林都市であり、このほか、元末の獅子林、明代の拙政園、清末の留園があり、四大名園の名で知られる。

### 註

(1) 蘇舜欽集(沈文倬校点。上海古籍出版社、一九八一年)八。

### (15) 瘦西湖(江蘇省)

揚州市の西北にある著名な景勝地「瘦西湖公園」にある湖の名もとも隋唐期、揚州の羅城(一般の住宅・商業地)内を走っていた、曲折した水路(保障河)を美しく整備したものであり、ほ

かの水路と通じあう。清代、天下の名勝、杭州の西湖と較べて、すつきりと美しい(清瘦・秀麗)とことから瘦西湖と呼ばれ、五亭橋などの名所がある。

清の金農は、「平山堂」(北宋の歐陽脩が蜀岡上に造つた、見晴らしのよい遊宴の場所)詩のなかで、堂上から見おろした湖畔の景色を、

夕陽返照桃花渡 夕陽返照す 桃花の渡

柳絮飛来片片紅 柳絮飛来す 片片の紅

紅い桃の花が咲き乱れる園林「桃花渡」(桃花場ともいう。瘦西湖の長堤上にあつた)付近は、いま夕日の照り返しをあびていつそう燃えたち、空いちめんに乱舞する白い柳絮(柳の綿毛)さえも、ひとつひとつみな紅く染まっている と詠む。晩春の絢爛たる湖畔の夕景色が、目に浮かぶようである。

### 註

(1) 石川忠久『漢詩をよむ 風土と人々(江南の巻)』(日本放送出版協会、一九九四年)一五七頁。

### (16) 岳飛墓(浙江省)

岳飛とは、南宋の初め、華北に侵入した金(女真族)に抵抗し、各地を転戦して輝かしい武勲をあげ、徹底的な抗戦を主張した猛將の名である。しかし、金との講和を画策する宰相秦檜の策謀にかかり、投獄されて死ぬ(紹興十一年(一一四一)、三十九歳)。このとき、獄卒の隗順は夜半にこっそりその遺体を背負って、銭



塘門外の九曲叢祠（杭州市内の少年宮の北）に埋葬し、目印として二本の橋の木を植えた。

二十年後の紹興三十二年（一一六二）、即位した孝宗は輿論に配慮して、岳飛の名譽を回復し、現在の「岳墳」（西湖の西北の湖畔、棲霞嶺の南麓、西泠橋の近辺）に手厚く改葬した。そして嘉定十四年（一一二二）には、岳飛の靈を祭る岳王廟（岳廟）の基礎もできた。

岳飛の悲劇的な境涯は、愛国の烈士、民族の英雄として、後世の人々に深い感銘を与えた。とくに宋末・元初以降、岳飛を弔う詩が急増し、「数十百篇を下らず」（元末・明初の陶宗儀『輟耕録』卷三）とまで記される著名な詩跡となる。

なかでも落涙をさそう有名な詩の一つ、元の趙孟頫「岳鄂王墓」（岳鄂王「岳飛は死後、鄂王に封ぜられた」の墓）には、

南渡君臣輕社稷 南渡の君臣 社稷を軽んじ

中原父老望旌旗 中原の父老 旌旗を望む

英雄已死嗟何及 英雄已に死す 嗟くも何ぞ及ばん

天下中分遂不支 天下中分して 遂に支へず

長江を渡った南宋の君臣たち（高宗と秦檜）は、国家としての威厳を棄てて講和・停戦し、北中国に残された父老は、ひたすら北伐する官軍の御旗を待ち続けた。その切なる願いも、英雄岳飛が死んでしまったからには、もはや嘆いてもどうにもならない。天下は北の金と南の宋とに分断されて、かくして統一の情勢を持ちこたえることができなかつたのだと歌う。

『大明一統志』卷三十八にいう、「今、その墓上の枝は皆南に向かふ。識者謂へらく、その忠義の感かす所なり」と。

悲劇の英雄岳飛の墓は、明朝の愛国の忠臣于謙の墓とともに、天下の名勝西湖に、凜然たる精神的な輝きを添えることになった。清の袁枚はこの点を強調して高らかに歌う、「人間（人の世）才めて西湖を重んずるを覚ゆ」（岳王の墓に謁「見」して十五絶句を作る」の一）と。

ちなみに現在の岳王廟は、東の忠烈祠と西の岳飛墓とに二分され、墓園内には鎖に繋がれた秦檜夫婦の坐像がある。

#### 註

(1) 元詩選初集（丙集・松雪齋集）

(2) 袁枚「謁岳王墓作十五絶句」其十五 人間才覺重西湖（小倉山房

詩集二六）

#### (17) 岳麓山（湖南省）

湘江の西岸に位置し、江を隔てて長沙の城と向かいあう名山の名（海拔二九五メートル）。長沙市の西郊にあるこの岳麓山は、南岳衡山の七十二峰の一つであり、その北麓に当たるための命名という。南岳衡山の首にあたる回雁峰（衡陽市）に対して、その足（麓）に当たる、というわけである。単に「麓山」ともいう。

岳麓山は、名勝古跡に富んでいる。山麓にある湖南大学の校園内には、宋代の四大書院の一つ「岳麓書院」がある。少し山を登れば、紅葉の美しい楓樹にかこまれた清風峽の中に「愛晚亭」が建ち、さらに石段を登った中腹には、湖南省最古の名刹「麓山寺」があって、そのほとりには清らかな名水「白鶴泉」が湧いている。

岳麓書院は北宋時代（九七六年）の創建、南宋の著名な儒学者

朱熹や張栻らが講義し、最盛時の学生数は千人に達したという。千年の長い歴史をもつ学府である。

この岳麓書院付近は、宋代以来の有名人詩跡であり、譚修・周祖文『岳麓書院歴史代詩選注』(増訂本、湖南大学出版社、一九九五年)には、三百余首の詩を収めている。その一つ、朱熹の「石瀨」(清風峡下の浅瀬の名)詩には、「暮館 寒声繞り、秋空 澄碧動」とあり、明の戴嘉猷「岳麓に遊ぶ」詩には、「肱を曲げて聊か仮寐(仮眠)すれば、仿佛として(おぼろに)朱(熹)張(栻)を見る」という。ちなみに、現存の建物は清代のものである。

愛晩亭は、清の乾隆五十七年(一七九二年)の創建とされ、初め紅葉亭・愛楓亭と呼ばれたが、清の有名な詩人袁枚が杜牧の「山行」詩の一節「停車坐愛楓林晚」(車を停めて坐るに愛す楓林の晩)にもとづいて改名したと伝えられる(杜牧自身は長沙には来ていない)。

岳麓寺は西晋の武帝泰始四年(二六八)の創建とされる古刹であり、唐の李邕「麓山寺碑」(現存、七三〇年作)で名高く、「岳麓山寺」ともいう。

大暦四年(七六九)、杜甫はここを訪れて、「岳麓山・道林の二寺の行」を作った。道林寺は今日すでに失われたが、岳麓山下の寺院の名であり、唐代、山中の岳麓寺と並ぶ名刹として知られ、晩唐の詩僧齊己が長く住した。杜甫は歌う、「寺門高く開く 洞庭の野(原野) 殿脚(寺殿の脚) 挿み入る 赤沙の湖(洞庭湖の西に連なる湖の名)」と。

また中唐の劉長卿「道林寺より西のかた石路(石段)に入り、麓山寺に至りて……」詩(大暦六年の作?)には、「香は青き露に

随ひて散じ、鐘は白き雲を過りて来る」と歌う。明の李東陽も、こう詠む、「万樹の松杉 双径(二つの小道)合し、四山の(吹きくる)風雨 一僧寒し」(岳麓寺に遊ぶ)と。

岳麓山は、湖南の古城「長沙」を代表する名勝なのである。

## 註

- (1) 朱熹「石瀨」暮館繞寒泉、秋空動澄碧(文公集補鈔「宋詩鈔補」)
- (2) 戴嘉猷遊岳麓「曲肱聊仮寐、仿佛見朱張」岳麓書院歴史代詩選注増訂本(二十一頁)
- (3) 杜甫「岳麓山道林二寺行」寺門高開洞庭野、殿脚挿入赤沙湖(全唐詩三三三)
- (4) 劉長卿「自道林寺西入石路、至麓山寺……」香隨青露散、鐘過白雲來(全唐詩一四八)
- (5) 李東陽「遊岳麓寺」万樹松杉双径合、四山風雨一僧寒(明詩別裁集三)

## (18) 李白故里(四川省)

「永遠の旅人(客)」とも評される詩仙李白は、少数民族の子として西域に生まれ(七〇一年)、五歳のころ、父親(李客)とともに蜀(四川省)の綿州昌隆県清廉郷(江油市の西南十五キロの青蓮鎮(青蓮郷))に移り住んだ。そして二十五歳のころ、蜀を出て旅立つまでの二十一年間にわたって、この清廉郷の住居を中心に活動する(昌隆県は先天元年(七一二)、昌明県に改められ、五代には彰明県となる。他方、清廉郷も明清以降、一般に青蓮郷と記される)。

この故里は、李白みずから字音・字義の両面にわたる一種の双関語から成る「青蓮（清廉）居士 清廉郷出身の脱俗的な青蓮居士」と号した点からも、ほぼ立証される（後引の松浦説）。とすれば、清廉（青蓮）郷こそ、秋の静かな夜、「牀前（ベッドのそば）月光を見る、疑ふらくは是れ 地上の霜かと。頭を挙げて 山月を望み、頭を低れて 故郷を思ふ」（「静夜思」）と歌った望郷詩の絶唱の「故郷」として、永遠に忘れがたい詩跡である。詳しくは、松浦友久『李白伝記論 客寓の詩想』（研文出版、一九九四年）第三章参照。

杜甫は上元二年（七六一）。翌年が李白の没年、蜀の成都で、消息のとだえた十一歳年長の李白の身の上を心配して、「匡山は書を読みし処、頭白し 好しく帰りに来るべし」（「見許」と歌った。この匡山は大匡山（大康山）を指すとされ、清廉郷のはるか北にあった（江油市の西北十五キロの大康郷）。

大匡山の北に連なる峰が戴天山である（戴天山は大匡山の別名ともいう）。李白が蜀を出る前に作った数少ない詩の一つ、「戴天山の道士を訪ぬるも遇はず」は、「犬は吠ゆ 水声中、桃花露を帯びて濃やかなり（しっとり）と美しい」と歌い起し、「人の（道士の）去きし所を知る無く、愁ひて倚る 西三の松」と結ぶ。



李白の住居あと？  
（隴西院の中）

少年李白の落胆ぶりが、まざまざと目に浮かぶがようである（十九歳ごろの作）。  
今日、青蓮鎮付近には、李白の住居あとと伝える「隴西院」、妹（李月円）の墓とその住居あ

と「粉竹楼」、洗墨池、太白祠などが残り、江油市の北郊（昌明河畔）には李白紀念館が建つ。詳しくは、吳丹雨・梁吉充『李白与江油』（電子科技大学出版社、一九九二年）など参照。

### 註

- (1) 李白「静夜思」 牀前看月光、疑是地上霜。举頭望山月、低頭思故乡（校注唐詩解詁辞典六七八頁）
- (2) 杜甫「不見 匡山讀書処、頭白好歸來（全唐詩二二七）」
- (3) 李白「訪戴天山道士不遇」 犬吠水声中、桃花帶雨濺…… 無人知所去、愁倚西三松（全唐詩一八二）

### (19) 三蘇祠（四川省）

三蘇とは、北宋の蘇洵とその子、軾・轍兄弟の総称。この父子三人は、いずれもすぐれた散文家として唐宋八大家のうちに数えられ、なかでも蘇軾（一〇三六—一一〇一）は、学問・芸術（詩・詞・書・文）の諸分野にすぐれた天才として知られる。

蘇軾兄弟の生家は、蘇軾みずから「我が家は 江水（長江）の初めて源を発するところ」（金山寺に遊ぶ）と歌うように、長江の上流「岷江」（蜀江）に臨む眉州眉山（成都市の西南九十里）の眉山（城内の西南隅、紗縠行）（絹織物業者の集まるところ）内にあった（ただし、小地主らしい）。その西南には、蜀（四川省）の名峰峨眉山がそそりたつ。

元の時代、この生家（蘇洵の住居）の跡地に、三人を記念する「三蘇祠」が建てられ、明初の洪武年間（十四世後半）、重修された（『大明一統志』卷七十一）。



清初の康熙十一年（一六七二）、眉州を通った王士禛（漁洋）は、ここを訪ねて、「眉州にて三蘇公の祠に謁す」という詩を作った。詩中には、廟内の様子が、「長公（蘇軾）の遺像（石刻）は竜眠（宋の有名な画家李公麟）の筆、馬券（天子から賜った馬であることを証明する蘇軾の文（の文字））剥落す 涪翁（黄庭堅）の書」と歌われている。そして蘇軾兄弟が、この故郷で静かに余生を送ることなく没したことを悼む。

ちなみに、現在の三蘇祠は、清代以降の再建・増築を経たものであり、蘇氏ゆかりの洗砚池や旧井などが残り、三蘇関係の資料が多く集められている。

## 註

(1) 蘇軾「遊金山寺」我家江水初發源（蘇軾詩集七）

(2) 「眉州謁三蘇公祠」（題下自注「祠即故宅、今為眉山書院」）長公遺像竜眠筆、馬券剥落涪翁書（漁洋山人精華録三）

## (20) 嘉峪関（甘肅省）

明代の万里の長城の西端に位置する関城（城壁で囲まれた関所）の名。東端の渤海湾に臨む山海関（河北省秦皇島市）と、東西一対をなす軍事上の要地である。

明初の洪武五年（一三七二）、將軍馮勝は、モンゴル軍を撃退して甘肅の地を平定したとき、西方の要塞としてこの関城を設けた。一九六五年にできた新興の鉄工業都市、嘉峪関市の西郊三キロの地にある。関所の名は、峻険な嘉峪山の西麓に置かれたことにも

とづく。

嘉峪関城は、台形をした二重の城壁（高さ約十二メートル）から成り、全周〇・七キロ強、東西の西門上には三層の城楼が建ち、「天下の雄関」の名に恥じない（ただし、その位置は、漢の玉門関より東へ三〇〇キロ以上も後退した）。南には、白い雪をいたたく祁連山脈が連なり、北には、広漠たるゴビ砂漠が広がっている。西域と中国内地とをつなぐ交通幹線上に位置したのである。

嘉峪関の詩跡化は、新疆へ流刑となった清の洪亮吉や林則徐らにもとづく、といってもよいだろう。洪亮吉は、流刑地の伊犁（新疆ウイグル自治区の西北端、伊寧市付近）から赦されて帰還する途中、「嘉峪関に入る」詩を作り、無事に帰れる喜びをこう歌う、「風は通ふ 管籥の声（かぎの音。ここでは城門を開閉する音）、巖窟（巖のごとくそそりたつ城門のかんぬき） 忽然として（突然） 拓く。城垣（城壁） 金碧（黄金と碧玉）のごとく麗しく、始めて見る 瓦もて屋（屋根）を作るを」と。

また、アヘン戦争で勇名をさせた林則徐も、同じく伊犁へと流された。流刑地へと赴く途上の豪放・悲涼の作、「出嘉峪関感賦」（嘉峪関を出でて感じて賦）（詩（その一）には、こう歌われている（七律の後半）。

天山巉削摩肩立 天山は巉削として 肩を摩して立ち  
瀚海蒼茫入望迷 瀚海は蒼茫として 望に入りて迷ふ  
誰道崑函千古險 誰か道ふ 崑函は千古の險なりと  
回頭只見一丸泥 頭を回らせば只だ見る 一丸泥  
険しくそそりたつ天山（祁連山脈）の峰々は、まるで肩をこすりあわせるように連なり、眼前の瀚海（ゴビ砂漠）は、あてども



なく広がって目をまどわせる。いったい誰が言ったのであろうか、崑山や函谷関は、永遠不変の天下の要害などと。ふりかえって眺めれば、あたかも丸い泥の固まりのように小さいではないかと。時に道光二十二年（一八四二）、作者五十八歳である。最後の句はもちん、嘉峪関の高大・雄険な偉容を誇張した表現である。

明・清期における嘉峪関は、西域と本土との境界をなし、いわば漢・唐時代の玉門関と共通するイメージを備えた新しい詩跡なのである。

## 註

(1) 洪亮吉「入嘉峪関」風通管鑰声、巖扃忽然拓。城垣金碧麗、始見瓦作屋（嘉峪関詩選（孫一峰主編、甘肅人民出版社、一九八七年）二十五頁）

(2) 近代詩一百首（鍾鼎選注、上海古籍出版社、一九八〇年）十二頁

## (2) 敦煌・莫高窟（甘肅省）

（過去の）中国の西北端に位置するオアシス「敦煌」は、前漢以来、東西（シルク・ロード）と南北（北方遊牧民とチベット族）の交通の要衝として繁栄した国際都市であった（漢・唐の敦煌県城は、一般に現在の敦煌市の西約三キロの故城（旧城、党河の西岸）とされるが、まだ確証はない）。ただ唐代では、主要な西域ルートからはずれた辺境都市となり、むしろ仏教の霊場「莫高窟」（莫高は唐代の郷名）をひかえた宗教都市として知られた。

莫高窟とは、敦煌市の東南約二十五キロ、鳴沙山東端の断崖に穿たれた石窟寺院をいう。伝えるところによれば、前秦の建元二年（三六六）、千仏（無数の仏）のとき金色の光を見た沙門（僧）の染僧が、当地（大泉河の流れる、鳴沙山と三危山にはさまれた峡谷）に開鑿して以来、十三世紀の元初に至るまで、仏教東伝のルート上に位置していたこともあって次々と石窟が掘られ、俗に「千仏洞」と呼ばれるほどにまで増えた、宗教上の一大聖地である。まさに壮麗な宗教芸術の殿堂であり、現在もなお、四九二の石窟内部に、色彩豊かな仏教の壁画と塑像を見ることができ。

莫高窟の全盛期は、唐代である。当時、石窟の外部には多くの木造建築が立ち、棧道で石窟間を結んでいた。敦煌（沙州）が吐蕃（チベット）の支配下（六十七年間）から脱した大中二年（八四八）以後、二十余年間に成るとされる「敦煌廿詠」（敦煌の名勝・旧跡を詠んだ七言律詩の連作。作者未詳）その三に、「莫高窟詠（莫高窟の詠）があり、当時の隆盛ぶりを歌う。「雪嶺（雪をいたたく三危山）青漢を干し（そびえて青空につきささり）、雲楼（雲にとどく高樓）碧空に架す（高々と青空にかかる）」と歌ったあと、石窟寺院をこう描写する、

重開千仏刹 重ねて開く 千仏刹  
旁出四天堂 旁く出づ 四天堂

数知れぬ石窟寺（千仏洞）が重なりあうように穿たれ、四天王（四方を守護する四神、護法神）を祀る仏殿が、あちこちに姿をみせる。

また、敦煌の土豪張義潮が、大中二年、吐蕃から敦煌を奪回したときの喜びを歌う詩「敦煌」（作者未詳）も、前掲の「敦煌廿



詠」とともに、第十七窟（いわゆる蔵経洞）から発見されている（敦煌遺書の一）。その一節に、こう歌われる、「歌謡再び復りて（よみがえる）唐国に帰し、道には舞ふ 春風 楊柳の花（白い柳絮）」と。道に乱舞するのは、単に柳絮だけでなく、敦煌の人民を含めての表現であろう。

## 註

- (1) 作者未詳「莫高窟詠」（敦煌廿詠）雪嶺干青漢、雲樓架碧空（全唐詩補編「補全唐詩拾遺三二」）
- (2) 作者未詳「敦煌」歌謡再復帰唐国、道舞春風楊柳花（全唐詩補編「補全唐詩拾遺三二」）

## (2) 麦積山（甘肅省）

天水市の東南四十五キロ、秦嶺山脈の西端に位置し、峰の形が麦わらを高く積みあげた姿に似ているための命名という。この麦積山は、敦煌・雲岡・竜門とともに、中国の四大石窟の一つに数えられる。「秦川（関中平原）の勝境」（後引の祝穆の語）である。石窟の造営は後秦（三八四—四一七）に始まり、清代まで続いた。宋代の編纂『玉堂閑話』（後述）には、五代の石窟寺院の状況を、こう伝える、「青雲のたなびく山の半ば、峭壁（きりたつ断崖）の間（ところ）に、石を鑄りて仏（像）を成り、万龕千室（無数の仏龕・石室）（をなす）。人の力と曰ふと雖も、その鬼功（鬼神のしわざ）かと疑ふ」と。

今日もなお、高さ一四二メートルの断崖上に、一九四の石窟が

あり、七千余体の塑像（泥塑が中心）と多くの壁画を伝えている。「壁画館」敦煌に対して、「彫塑館」の異名をもつ。

杜甫は乾元二年（七五九）、秦州に滞在していたとき、この仏教の聖地を訪れ、「山寺」詩を作った。南宋の祝穆『方輿勝覽』巻六十九、天水軍の条によれば、後秦の姚興が「山を鑿ちて修った麦積山の瑞応院を詠んだ作品である。その一節にいう、乱水人を通じて過ぎしめ、懸崖（そりたつ断崖）（屋（仏殿）を置くこと卒し」と。

乱水は「乱石」にも作る。開元二十二年（七三四）、天水一帯は、大地震に襲われた。二十五年後の当時にあつても、麦積山付近は、その爪痕を残していたらしい。上掲の二句は、石質のもろい山石が崩落して道をふさぎ、どうにか通れるような状況と、地震をたえぬいた建物の堅牢さを表現したものである（李濟阻「秦州踪迹」『杜甫隴右詩研究論文集』甘肅人民出版社、一九九五年所収）など。ただし、同論文集に収める王廷賢「読『隴右詩』志疑」は、杜詩の山寺は、麦積山のそれを詠んだものではないとする。ちなみに、今日、石窟群が東西に分断されているのは、この同じ大地震の影響だといふ。

秦州（天水市付近）出身の王仁裕は、五代初めの九一年、「題麦積山天堂」（麦積山の天堂に題す）詩を作り、山を詩跡化する。この詩を引く『太平広記』巻三九七、麦積山の条所引『玉堂閑話』（王仁裕が書いた各種の筆記資料を集めて編纂したもの）（周勛初説、编者未詳）は、石窟の状況を詳細に記した貴重な古い資料である。これによれば、絶壁に張り出して、まるで天空に懸るかのような、高く険しい梯（階段、はしご）を登りゆくと、「千房万



室」が空中高く造られ、人々はこわくてふり返れない。詩題の「天堂」とは、最高処にある石窟の名、西崖の最高処東端にある「天堂洞」。高さ七、八十メートル。北魏の晩期に成る。そこまで登りゆく勇氣のある者は、いなかった。ただ王仁裕だけは登りきって、天堂の西壁上に詩を書きつけたという。

詩の前半には、高峻さを、こう歌つ、

躡尽懸空万仞梯 躡み尽くす 懸空 万仞の梯

等閑身共白雲齊 等閑に 身は 白雲と共に齊し

簷前下視群山小 簷前に下視すれば 群山小さく

堂上平分落日低 堂上に平分すれば 落日低し

天空に懸る高く険しい梯を踏みしめながら頂上近くにたどりつ

くと、思いがけなくも、わが身は、ただよう白い雲と同じ高さ。

天堂（洞）の簷（窟簷）さきから見おろすと、群がる山々は小さ

くなり、堂上から水平に視線をのばせば、沈みゆく太陽は、はる

か下にあると。

詩中には、故郷の名勝を征服した満足感がただよう。時に作者

三十二歳である。

### 註

(1) 杜甫「山寺」乱水通人過、懸崖置屋牢（全唐詩二二五）

(2) 全唐詩七三六。

### (23) 火焰山（新疆ウイグル自治区）

吐魯番盆地（天山山脈東部の南麓）の東北部に、やや斜め方向

に一〇〇キロ連なる紅い砂岩の山脈を呼ぶ（明代以降の）名称。古くは「火石山」「火山」などという。高昌故城（唐代の西州・交河郡城、トルファン市の東南約四十キロにあるシルク・ロードの要衝）のほとりである。

トルファン盆地は、「アジアの井戸」とも呼ばれるように、全体の標高が海面下という、中国で最も低い土地であり、乾燥・炎熱・強風を特色とする。そしてすり鉢状の地形から、夏はフェーン現象が生じて異常高温（時に四十七度以上）となり、熱の発散が遅いため、冬期でも比較的暖かかった。

火焰山の乾ききつた紅い山肌は、長年の風化と浸蝕作用によって深く彫り刻まれ、草木は全く生えていない。地表温度が五、六十度を越す（時には八十度に達する）真夏になると、強烈な太陽が照りつけて赤い光を反射し、あたり一面にかげろうが立つた。

このとき、深いしわ（ひだ）をもつこの紅い断崖も左右にゆれて、まるで燃えたつ炎（火焰）のように見えた。「火山」「火焰山」などと呼ばれるゆえんである。

火焰山の詩跡化は、唐代の辺塞詩人岑参の詩によって確立する。

天宝八載（七四九）、安西都護府（庫車）へ赴任する途中の嚴寒期、うわさで聞いていた異様な山容を初めて眺め、激しい衝撃を受けて、「經火山」（火山を經）を詠んだ。

赤焰燒虜雲 赤焰 虜雲を焼き

炎氣蒸塞空 炎氣 塞空を蒸す

燃えたつ赤い炎は、胡地（西北の辺地）の雲を紅く焼きこがし、立ちのぼる熱気は、辺境の空をむんむんと蒸したてる。

山下には熱風が吹きわたり、人も馬も、汗が流れ落ちたととも歌



う。まるで噴炎をあげる活火山を思わせる描写であるが、もちろん単なる詩的誇張にすぎない。

第二回めの西域行のとき（天宝十四載）にも、「交河郡に使ひす」という詩を作った。題下に「郡は火山の脚に在り。その地は苦だ熱く、雨雪無し」云々と注する（詩題の一部ともする）とともに、こう歌った。「暮に交河城（交河郡城（高昌故城））に投れば、火山赤く崔嵬たり（そそりたつさま）。九月（晩秋）尚ほ汗を流し、炎風 沙埃（沙ほこり）を吹く」と。このほかに、岑参は「火山」の語を愛用する。

豊かな中国古典詩の中にあっても、「火山」を詠む詩はまれである。そうしたなか、六朝・宋の鮑照は、「苦熱行」のなかで、南方の暑熱を表す「火山」を詠んだ。岑参は、それを西域の「火州（火の州）」とも呼ばれる炎熱と乾燥の風土を表す詩語へと転換し、噴炎を吐く活火山のような幻想的イメージをつけ加えたのである。

明の陳誠も、この岑参詩のイメージを受けて、「炎炎たる気焰（燃えさかる炎と熱気）は 空を焼かんと欲す」（「火焰山」と歌う。「火山」（火焰山）こそ、トルファン盆地特有の乾燥した灼熱の大地を象徴する風景なのである。

ちなみに、火焰山は、有名な『西遊記』の中にも登場する。三蔵法師一行が燃えさかる炎にはばまれて立往生したとき、孫悟空が大活躍して、芭蕉扇で火を消す名場面である。

## 註

(1) 岑参「経火山」（全唐詩一九八）

(2) 岑参「使交河郡」暮投交河城、火山赤崔嵬。九月尚流汗、炎風吹沙埃（全唐詩一九八）

(3) 陳誠「火焰山」炎炎気焰欲焼空（歴代西域詩選注（新疆人民出版社、一九八一年）九十三頁）

## (24) 龜茲故城（新疆ウイグル自治区）

龜茲（キジ）と読むのは誤り）とは、前漢時代以来、天山南路の諸国をほぼ支配してきた龜茲国の都城となり、東西交易の中継点として繁栄した城である。

唐朝は、貞観二十二年（六四八）、反抗する龜茲国を滅ぼし、安西都護府を西州（トルファン）から当地（龜茲王城）へと移した。このあと、吐蕃などの攻撃を受け、安西都護府（ついで安西節度使）の設置場所は再三移動したが、長寿元年（六九二）以降の百年間、龜茲王城の中に置かれ続けた（貞元三年（七八七）、吐蕃によつて陥落）。このため、安西は龜茲の別名ともなる。

安西（鎮西）都護府（安西節度使）は、天山山脈以南の西域を広く統治する最高の行政・軍事機関であり、総計二、三万の兵士を擁する四つの軍鎮、龜茲（クチャ）・于闐（ホ・コータン）・疏勒（カシユガル）・焉耆（カラシャール。後に「碎葉」「スイアブ」に代わる）を支配した（安西四鎮）。安西都護府の存続は、西域（タリム盆地周辺）の制圧を意味したのである。

安西都護府の置かれた「龜茲王城」（龜茲鎮）の遺跡は、庫車県の旧城と新城の間にある「皮朗旧城」である。ここは漢代以来、龜茲国の都城があったところであり（ただし、漢代の「延城」と



唐初の「伊邏盧城」では、規模が異なる、「(全)周十七八里」(唐の玄奘『大唐西域記』巻一、屈支国の条)の規模は、残存する城壁からの推定(約七キロ)とほぼ一致する。

豊かなオアシス「龜茲」(丘茲・屈支とも書く)は、唐初、「伽藍百余所、僧徒五千人」(『大唐西域記』巻一)と記される仏教都市であり、仏典の漢訳で知られる鳩摩羅什の出身地でもある。また有名な「龜茲伎」(音楽・舞踊)の発祥地であり、龜茲錦・葡萄酒・良馬の名産でも知られた。

安西都護府は、王維の有名な送別詩「元二の安西に使ひするを送る」によって広く知られる。さらに辺塞詩人岑參が、天宝九載(七五〇)前後の一年あまり、安西四鎮節度使高仙芝の幕僚として滞在し、多忙な日々を送った場所でもある。岑參の「安西館中思長安」(安西の館(役所・幕府)中にて長安を思ふ)詩には、まず望郷の思いを、「(わが)家は 日の出づる処(都長安)に在り。朝来(今朝) 東風(春風)を喜ぶ。風は帝郷(都)従り来り、家信(家からの便り)の通せしと異ならず」と歌う。

そして都長安から約七千里(三五〇〇キロ前後)も離れた安西付近の地勢を、こう表現する。

絶域地欲尽 絶域 地尽きんと欲し

孤城天遂窮 孤城 天遂に窮まらん

この最果ての地では、足もとの大地もつきはてようとす、この孤立する城塞では、頭上の天空も、このまま窮まりはてようとす。と。

また「宇文判官に寄す」詩のなかで、目につつる荒涼たる敵塞の風景を、「終日(一日中) 風と雪と、連天(毎日) 沙復た山」

と歌う。龜茲故城は、王維と岑參の詩によって忘れがたい詩跡となったのである。

## 註

(1) 岑參「安西館中思長安」 家在日出処、朝来喜東風。風従帝郷来、不異家信通(全唐詩一九八)

(2) 岑參「寄宇文判官」終日風与雪、連天沙復山(全唐詩二〇〇)

## (25) 北庭故城・輪台(新疆ウイグル自治区)

北庭故城とは、天山山脈以北の西域を広く統治する行政・軍事の最高機関「北庭都護府」(則天武后の長安二年(七〇二)設置後に北庭節度使に改称)の置かれた唐代の庭州金満県城の遺跡である。天山東部の博格達峰の北麓、吉木薩爾県城(烏魯木齊市の東約一三〇キロ。吉木は「金満」の転音、薩爾はウイグル語で「城」の意)の北約十キロの「護堡子破城(子)」を指し、不整形な長方形をした内外二重の城壁が残存する。

羅城(外城)は約四・六キロ、内城は約三キロであり、前者は唐初(後に二度修補)、後者は高昌回鶻(ウイグル)時期(十世紀ごろ)の築造らしい(秦浩『隋唐考古』南京大學出版社、一九九二年)。

庭州(金満県城、ビシュバリク)は、古くから周辺の中心地となり、唐代には、新しい天山北路(伊州、北庭、輪台、碎葉)および金沙嶺越えの「他地道」(天山を縦断して西州に至る)の通る交通の要衝に位置した。当地に設置された北庭都護府は、兵士二

万人を擁して、異民族の侵攻に備えたのである。

唐代の辺塞詩人岑参は、天宝十三載（七五四）、四十歳?のとき、安西・北庭節度判官として、節度使封常清の幕下に入るために当地を訪れ、百数十キロ西の輪台県城（庭州の属県。ウルムチ市付近であるが、遺跡は未確定。現在のところ、市の北の米泉県「破城子」遺跡と、市の南の烏拉泊古城が有力。天山南麓にある漢代の輪台県との混同に注意）との間を往復しながら、約三年間滞在し、長篇のすぐれた歌行体の詩を多く作った（天山の雪の歌…「熱海之行」…「輪台の歌」…「火山の歌」…など）（後引の詩を除く。最初の西域行（安西）庫車（滞）のときよりも、質量ともに数段優る）。

天宝十四載（七五五）に成る「北庭作」（北庭にて作る）詩には、北庭の地理的位置を、こう表現する。

孤城天北畔 孤城は 天の北畔

絶域海西頭 絶域は 海の西頭

この孤立した城塞は、広大な天空の北辺にあり、この最果ての地は、広漠たる沙の海の西側にあると。

楽しいはずの宴会も、さまざまな民族の言葉と音楽が入り乱れ、望郷の思いがつのりゆく。「座は参ふ 殊俗の語、楽は雑ふ 異方の声」（「封大夫「常清」の宴に陪し奉る」）、「旧国（故郷）は天末（空のはて）に眇く、帰心 日に悠なる哉」（「北庭の北楼に登りて、幕中の諸公に呈す」）。

岑参は北庭よりも輪台県城（北庭都護府の管轄下にある戦略要地・交通の要衝）に多く住み（約二年間）、すぐれた詩を残した（ただし、岑参は北庭と輪台の語を通用する）。「独孤漸と別れを

道ふ……」（天宝十五載の作）には、輪台の荒涼とした風景を、こ

う歌う、「窮荒 絶漠（この最果ての沙漠地帯では） 鳥も飛ばず、万頃千山（数知れぬゴビ灘と山々に囲まれ） 夢も猶ほ懶し（夢の中であつてさえ、帰郷の旅路の困難さに怯えてしまつた）」と。

輪台での名作二首の一節をあげよう。「走馬川（輪台県城の西約一五〇キロの瑪納斯河（白楊河）？）の行」には、晩秋のすさまじい強風をこう歌う、「輪台九月 風夜吼え、一川（水）の涸れた川（いぢめん）の碎石は 大きき斗（一斗（約一升））入りのます」の如く、風に随ひ 地に満ちて 石乱れ走る」（三句一韻）と。また「白雪の歌……」には、秋の半ば、突如襲いくる雪の奇景を、こう表現する、「北風 地を捲いて 白草（塞外特有の堅い草、牧草の一種）折れ、胡天八月 即ち（早くも）雪を飛ばす。忽も一夜 春風来りて、千樹万樹 梨花（白い梨の花）開くが如し」（「忽如……」は、まるで……のようだの意）と。

北庭故城と幻（未確認）の輪台は、未知の荒々しい風土「西域」を多様に歌いあげた辺塞詩人岑参の才能を、一気に開花させた、忘れがたい詩跡なのである。

### 註

- (1) 岑参「北庭作」（全唐詩二〇〇）
- (2) 岑参「奉陪封大夫宴」座参殊俗語、楽雜異方声（全唐詩二〇〇）
- (3) 岑参「登北庭北楼、呈幕中諸公」旧国眇天末、帰心日悠哉（全唐詩一九八）
- (4) 岑参「与独孤渐道别……」窮荒絶漠鳥不飛、万頃千山夢猶懶（全唐詩一九九）



(5) 岑参「走馬川行……」輪台九月風夜吼、一川碎石大如斗、隨風滿地石亂走(唐詩三百首)

(6) 岑参「白雪歌……」北風捲地白草折、胡天八月即飛雪、忽如一夜春風來、千樹萬樹梨花開(唐詩三百首)

## ②6 黄山(安徽省)

黄山市の北西にある黄山は、安徽省南部における最高峰(一八七三メートル)であり、古来、多くの薬草に恵まれた神仙の住む靈山「靈仙の窟宅」(『方輿勝覽』卷十六)であった。古代の帝王黄帝が山中で丹薬(仙薬)を煉ったという伝承にもとづき、唐の玄宗の天寶六載(七四七)の時、旧来の「黟山」の名を黄山に改めたのである。

今日、黄山は雲海・奇松・怪石・温泉の「四絶」で知られる屈指の景勝地であるが、もともと交通の不便な僻地にあつたため、唐代以降、ようやくその存在が広く知られ始めた。盛唐の李白は、「送温处士归黄山白鵝峰旧居」(温处士の、黄山の白鵝峰の旧居に帰るを送る)詩の冒頭で、黄山の高峻・秀麗な山容を、生き生きとこう歌った。

黄山四千仞 黄山は 四千仞

三十二蓮峰 三十二の蓮峰

丹崖夾石柱 丹崖 石柱を夾む

菌萐金芙蓉 菌萐 金芙蓉

黄山の高さは、四千仞(仞は七尺)、蓮の花を思わせる名峰は、三十二。丹い(花崗岩の)山崖が、すくくとそばだつ石の柱をは

さんで、ある峰は蓮の花のつぼみ、またある峰は金色に開いた蓮の花のよう。

続く晩唐には、もと僧侶の繆島雲が黄山に関する詩を数首残す。そのうちの一首、「黄山の諸峰を望む」詩には、「峰峰寒列して(寒々と列なり) 芙蓉簇る(蓮の花が群がり咲くかよう)、静かに想へば 嵩陽(河南の名峰嵩山)も 秀づること如かず」とたたえる。なお黄山の温泉についても、すでに繆島雲のほか、同時期の杜荀鶴も詩を残す。

黄山は、こうして詩跡化する。元の鄭玉「黄山に遊ぶ」詩にいう、「幾千百の澗(谷川)は蒼玉(碧玉のような水)を流し、三十六の峰は白雲(俗塵を遠く離れた神仙的世界の象徴)を生ず」と。劉夜烽・徐伝礼選注『黄山詩選』(安徽人民出版社、一九八三年)がある。

## 註

- (1) 李白「送温处士归黄山白鵝峰旧居」(全唐詩一七五)
- (2) 繆島雲「望黄山諸峰」峰峰寒列簇芙蓉、静想嵩陽秀不如(全唐詩補編上)(全唐詩補逸一一二)
- (3) 鄭玉「遊黄山」幾千百澗流蒼玉、三十六峰生白雲(黄山詩選)

## ②7 九華山(安徽省)

青陽県の西南部にある九華山(海拔一三四二メートル)は、黄山と並ぶ安徽省南部の名山であるが、古くは交通の便の悪い僻地の地にあつたため、ほとんど無名であった。盛唐期、新羅国の名

僧金地蔵が山中で修行して以来、地藏菩薩の靈場となり、中国四大佛教聖地の一つに数えられる（明・清期、栄える）。

九華山は、古くは陵陽山・九子山など、さまざまに呼ばれ、安定した山名をもたなかった。ほぼ同時期、詩仙李白も、この山を訪れ、九つの峰が蓮の華のように天空にかざされる秀麗な山容を見て、「九華山」と命名した（李白「九子山を改めて九華山と為す、聯句」序）。そして「望九華山 贈青陽韋仲堪」（九華山を望んで青陽（県令）の韋仲堪に贈る）詩のなかで、

天河挂緑水 天河 緑水を掛け  
秀出九芙蓉 秀出す 九芙蓉

山上の瀑布は、あたかも倒しまにかかる緑の水の天河、天空にそそりたつ峰々は、水面から出た九つの芙蓉の花と歌った。

続いて中唐の劉禹錫も、「九峰 秀を競ひ、神采（表情）奇異たる」山容に接して、「九華山の歌」を作った。「奇峰一たび見て魂魄（心）を驚かす、意に想ふ 洪炉（天地を指す）始めて開闢すと。疑ふらくは是れ 九竜（九匹の竜）天矯として（体を屈伸させつつ）天に攀らんと欲して、忽ち（突然）霹靂一声（雷鳴）に逢ひて 化して石と為るか。」

こうして九華山は、詩跡として確立する。晩唐期には、九華山人杜荀鶴や顧雲・殷文圭らが山中で勉強し、江南の文学の中心となった。寺尾剛「李白と九華山の『詩跡』化について」愛知淑徳大学国語国文『第二十号、一九九七年』の専論がある。

後世、名づけ親たる李白の跡を追いかけて訪れる人も多い。明の王陽明（守仁）は、「太白祠」（九華山中の化城寺の東にあった祠廟）（二首その二）のなかで、こう歌う、「謫仙（李白）棲隱

の地、千載 尚ほ高風あり」と。九華山は、今日もなお、李白ゆかりの伝承を多く留めている（太白書堂「址」・太白井・太白洗硯池（金沙泉）など）。

### 註

- (1) 李白「望九華山、贈青陽韋仲堪」（全唐詩一六九）
- (2) 劉禹錫「九華山歌」奇峰一見驚魂魄、意想洪炉始開闢。疑是九竜天矯欲攀天、忽逢霹靂一声化為石（全唐詩三五六）
- (3) 王陽明「太白祠」二首其一、謫仙棲隱地。千載尚高風（陽明全書一九（外集一））

### (28) 武夷山（福建省）

福建省の西北部、武夷山市（一九八九年、崇安県を改名する）の西南約十五キロ、神人（仙靈）「武夷君」が住み、「地仙の宅」と呼ばれた靈山の名（『太平寰宇記 卷一〇一』。約七・五キロの溪流ぞいに連なる「三三六六」の名勝で知られる「碧水・丹山（丹き山）」の仙境である。

三三とは、山中を九回折れまがって崇陽溪へとそそぐ「九曲溪」のこと、また六六とは、兩岸一帯にそそりたつ幔亭峰・大王峰・玉女峰・天柱峰・天遊峰など、三十六の奇峰をいう（ただし三十六は、実数と取る必要はない）。「崖石（切りたつた砂礫岩）は、悉く紅紫の二色にして、これを望めば、朝霞（朝焼け）の若し」（前掲書）といわれる。

南宋の陸游は、「朱元晦（朱熹）の武夷精舍（精舎は学校）に奇題す（遠くから詩を寄り、壁などに題してもらつ）」のなかで、

「山は高少（中岳の高山）の如く、三十六、水は邛崃（岷江にそそぐ邛水（四川省）に似て、九たび途（水路）を折る」と歌う。武夷山を歌う詩は、通常、晩唐の李商隱「武夷山」詩（仙道修業の虚妄さを諷刺）に始まるとされるが、山のある「閩中」（福建省）の開発が大きく進展し、宋学（朱子学）の中心地となった南宋期、武夷山は急速に著名な詩跡となる。事実上の「福建人」たる南宋の大儒、朱熹は、淳熙十年（一一八三）、九曲溪のうちの五曲の北の隠屏峰下に、武夷精舍を造り、数年間、ここで子弟の教育にあたった。

翌淳熙十一年、朱熹は、「淳熙甲辰仲春、精舍閑居、戲作武夷權歌十首、呈諸同遊、相与一笑」（淳熙甲辰の仲春、精舍に閑居せしとき、戯れに武夷權歌（舟歌）十首を作り、諸同遊（一緒に舟遊びをした人たち）に呈し（見せ）、相ひ与に「一笑」を作った（當時、五十五歳）。この權歌十首は、第一首が「九曲清溪」の総述、第二首以下が、一曲ごとに变化する風光の美を、清新・明快に歌いあげた七言絶句の連作であり、後世の唱和者を生むほど影響力をもった作品である。

いいかえれば、武夷山の詩跡化は、この朱熹の名高い詩にもとづく、と評してよい。第三首の前半には、神女を思わせる魅惑的な山容を擬人化して、こう歌った。

二曲亭亭玉女峰 二曲は亭亭たり 玉女峰

插花臨水為誰容 花を挿し水に臨みて 誰が為にか容つくる

二曲の西側には、玉女峰が高々とそそりたつ。峰の頂きに咲く木の花を、まるで簪のように髪に挿し、水鏡を見ながら、いったい誰のために、美しく化粧しているのだらうと。そしてユーモ

ラスに、こう歌い収める、彼女の色香に迷うことなく、私はさらに翠の山中に分け入ろうと。

武夷山は、以後長く歌いつがれる。明の陳絳邦「武夷に夜泛」詩は、月明下の溪流のきらめきを、こう歌う、「半輪の明月 峰頭に挂かり、万点の玻璃（七宝の一、水晶の類） 碧流に散ず（散乱する）」と。また同じ明の鍾惺「虎嘯岩（二曲の南）に宿る」詩には、岩の高さと溪谷の深さが、こう歌われている、「身を置く 星月（星や月）の上、魄を濯ふ 水煙（水上にただよう煙）の中」と。

## 註

- (1) 陸游「寄題朱元晦武夷精舍」五首其五、山如高少三十六、水似邛崃九折途（劍南詩稿校注「錢仲聯、上海古籍出版社、一九八五年」一五）
- (2) 文公集鈔（宋詩鈔）
- (3) 陳絳邦「武夷夜泛」半輪明月挂峰頭 万点玻璃散碧流（福建風物志（福建人民出版社、一九八五年）二一六頁）
- (4) 鍾惺「宿虎嘯岩」置身星月上、濯魄水煙中（閩中名勝詩粹（蔡厚示・盧善慶、福建人民出版社、一九八七年）二十九頁）

## (2) 泉州（福建省）

福建省東南部の海岸にある都市の名、現在の泉州市。晋江下流の北岸に位置し、泉州湾にのぞむ良港である。泉州城は、唐の開元六年（七一八）に造られ（全周一・二キロ）、五代の半ばごろ拡張されて、子城（内城）と羅城をもつ重郭構造となる（全周十キロ）。

南宋末から元朝を通じて、中国最大の対外貿易港として繁栄し、アラビア人（イスラム教徒）を中心とする多数の外国人が、城南の、晋江にのぞむ蕃坊（外国人居留地）に住んだ。市内に残存する清浄寺は、中国最古のイスラム寺院として有名である。また華僑の著名な出身地でもある。

泉州城は、晩春・初夏になると、深紅の刺桐花（インド原産のママ科の落葉高木、デイゴ）につつまれた。晩唐の陳陶は、「泉州刺桐花詠、兼呈趙使君（泉州の刺桐花の詠、兼ねて趙使君（大和三年（八二九）ごろ、泉州刺史となつた趙榮）に呈す）」詩（六首その二）のなかで、朝焼け（夕焼け）がたなびくような花城（花の城）の光景を、こう歌った。

海曲春深滿郡霞 海曲 春深し 郡に満つる霞

越人多種刺桐花 越人多く種う 刺桐の花

入り組んだ海辺にある泉州城は、春が深まると、城じゅう、紅い雲気につつまれる。閩越（福建）の人は、刺桐花をたくさん植えているのだと。

五代・南唐のとき、泉州城を大改築した留從効は、城壁の周囲に刺桐樹を植えたため、泉州城は「刺桐城」「桐城」などとも呼ばれるようになった（『方輿勝覽』卷十一など）。宋末・元朝のころ、アラビア人などが呼んだ「ザイトン（ザイツン）」の語は、「刺桐城」の刺桐の音訳（転訛）とされる（桑原隲蔵『蒲寿庚の事蹟』

『全集』第五卷所収）参照。

泉州には、唐代ころからアラビア人たちが訪れはじめた。とくに南宋時代、都臨安（浙江省杭州市）に近い地の利を占めた結果、泉州はついに広州（広東省）を凌ぐ中国第一の外国貿易港となつ

た。この側面も、詩中に詠みこまれる。中晩唐の薛能は、乾符二年（八七五）に作つた「福建（觀察使）の李大夫（李晦）を送る」詩のなかで、「秋来れば 海に幽都（北方から渡ってくる）の雁有り、船到れば 城は外国の人を添ふ（増し加える）」と歌う。外国の帆船は、一般に西南風の吹く夏に訪れて、東北風の吹く冬に帰つた。つまりその間の半年間が、蕃坊の最もぎやかな時期にあたる（もちろぬ、中国に残る人もいる）。

北宋の謝履「泉州城南の蕃坊付近」の歌には、まず住民の多さと耕地の不足する泉州の事情を述べた後、こう歌い収める、「州の南に海有りて 浩（広々）として窮り無し、毎歳 舟を造りて 異域（外国）に通ず」と。これは、海外へ通商に出かける泉州出身の人のことを詠んだ作品である。

## 註

- (1) 全唐詩七四六。
- (2) 薛能「送福建李大夫」秋来海有幽都雁、船到城添外国人（全唐詩五五九）
- (3) 謝履「泉州歌」州南有海浩無窮、每歳造舟通異域（泉州名勝詩詞選（福建人民出版社、一九八三年）十二頁）

## ③ 広州（広東省）

広東省の省都、広州市は、珠江の三角洲に位置し、秦・漢以来、南海の珍貨（犀角・象牙・瑇瑁・真珠・香料・沈香など）を積んだアジア各国の船が訪れ、絹織物や陶器・茶・銅銭などと交

換した、著名な貿易港である。

広州の名は、三国・呉の時代に始まる。唐代には、南中国第一の海外貿易港として繁栄し、貿易船の事務を掌る市舶使が置かれ、珠江に臨む蕃坊（外人居留地）には、十二万を越える外国人が住んだという。当時、アラブ人は、広州を「カンフウ」（広府の音訳）と呼んだ。今の広東省を広く治める嶺南節度使が常駐し、瘴氣（毒熱の気）ただよつ流罪の地「嶺南」（広東・広西）のなかで、独特の風気をもつ宝貨の地であった。

東晋の清廉の士、呉隱之は、広州の刺史（州の長官）に在任中、飲んだ者は貪欲になると伝える「貪泉」（石門水ともいう。広州の西北郊外十五キロの石門「水路の要衝」にあった）に赴いて飲み、こう歌った、「古人云ふ 此の水は、一たび飲れば 千金を懐ふ（財貨を貪る気持が起こる）と。試みに夷・齊（節操の士、伯夷・叔齊のこと。ここでは自らの比喩）をして飲ませむれば、終に当に心を易へざるべし」と（遠欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』晋詩卷十四には、「貪泉を酌みて詩を賦する」と題する）。

呉隱之の警世の歌の効果もなく、歴代の長官たちは、私腹を肥やし、巨富を得た。『南齊書』卷三十一、王琨伝には、「広州の刺史は、但だ城門を経て一たび過れば、便ち三千万錢を得」という慣用語を記す。晩唐の李群玉の「石門の成り」という詩にも、珠璣（各種の珍宝）を求める者ばかり、と嘆いて歌う、「誰か詠ぜん 貪泉 四句の詩を」と。

広州の南海貿易は、北宋期に空前の繁栄を見せたが、南宋・元代になると、その地位を泉州（福建省）に奪われた（清朝後期、再び盛んになる）。

広州の歌は、梁末の乱を逃れて訪れた江総の「秋日 広州城南樓に登る」詩の、「秋城（秋の城）に 晚笛（ひび）韻（うた）き、危樹（きし）高樓（たか）清風（せいふう）を引く」などに始まるらしい。

なかでも「諸名賢の題詠甚だ富む」（『大明一統志』卷七十九）第一の詩跡は、市内北部の遺跡「越王台」である。秦末、趙佗は自立して「南越国」を建て、都を番禺（今の広州市）に置き、善政を施した。そして前漢の武帝に滅ぼされるまで、百年弱、南越国の都城として栄えた（趙佗城）。越王台とは、死後も長く慕われた武王趙佗が築いた壮麗な楼台の名であり、北郊の越秀山（観音山）にあった（鎮海樓の西南の高い岡？）。

中唐の韓愈「送鄭尚書赴南海」（鄭尚書、權の南海（広州）に赴くを送る）詩には、嶺南節度使として着任した後の状況を、こう想像する（長慶三年、八三三の作）。

貨通師子国 貨は 師子国に通じ

楽奏武王台 楽は 武王台に奏す

盛んに師子国と交易し、武王台（越王台のこと）の上で音楽を楽しみなさる と。

越王台は、嶺南に左遷された宋之問「輿王（越王）台に登る」詩の中に、「地は湿（ぬ）びて 煙（も）や（嘗）に起こり、山は晴れて 雨半（な）は（ほとん）どいつも（も）来る」云々と歌われるのを始めとして、中唐の崔子向「越王台に題す」、晩唐の李群玉「中秋 越台にて月を見る」、許渾「冬日 越王台に登りて帰るを懐ふ」詩にも見え、以後、長く広州を代表する詩跡として歌いつがれた（南宋末の文天祥「越王台」、明の黃佐「越王台に登る」、明の黎民表「粵台山（越秀山）懐古」など）。ちなみに、許渾の詩には、「海辺の

花は盛んなり 越王台<sup>ごわうたい</sup> という。

明初（一三八〇）になると、北の越秀山上にまで拡張された廣州城の城壁の上に、五層（高さ二十八メートル）の鎮海樓（望海樓）が建てられ、城内を一望できる「嶺南第一の勝概（景勝）」となる（現在、廣州博物館として利用）。清の沈元滄は、「鎮海樓に登る」詩の中で、眼下に広がる繁華な廣州城を、こう歌った、「沙洲（珠江の中洲）は漠漠として（いちめん）に広がり」波濤靜かに、瓦屋は鱗鱗として（鱗のごとく）びりりと並ぶさま）煙火（炊煙）稠し」と。

廣州は、羊城・五羊城・穗城などとも呼ぶ。これは昔（戦国？）五人の仙人が五色の羊に騎り、「六つの穂の穂を執りて至り」（『太平寰宇記』巻一五七、廣州南海県、「五羊城」に引く）「南越志」）、人々に与えて祝福した、という伝承にもとづく。晩唐の李群玉（蒲潤（廣州市の北郊、白雲山の菖蒲潤）寺（衍字？）の後の二蔵に登る）（三首その一）に、「五仙 五羊に騎り、何れの代にか 茲の郷（廣州）に降りし」と歌われ、皮日休の詩にも、「五羊城は 層樓（層気楼）の辺りに在り」と、李明府の 任に南海に之くを送る」詩）と見える。

廣州市内には、越王台や鎮海樓のほかにも、光孝寺や六榕寺などの詩跡がある。光孝寺は、前漢の南越王趙建徳の旧宅あととされ、三国・呉の虞翻の謫所となった後、寺となる。梁のとき、禅宗の始祖達磨がたちより、唐のとき、六祖慧能が剃髪した名刹とされ、廣州の仏教の中心であった。中唐の劉言史は、「廣州の王園寺（光孝寺の旧称）にて伏日（三伏の日）（即事、北中の親友に寄す）」という詩のなかで、炎熱の異郷に身を置く憂愁を、こう歌う、

「誰か憐まん 炎に在る客（旅人）、一々に（一晚のうちに）壮容銷ゆる（元氣盛んな容貌が、すっかりやつれはてる）を」と。また六榕寺は、六朝・梁の創建（宝莊殿寺）、北宋のとき、淨慧寺と改称した。しかし北宋の文豪蘇軾が、境内にある六本の榕樹（ガジュマル）の古木を見て、「六榕」の二字を題して以来、一般に「六榕寺」と呼ばれ、九層の華麗な寺塔（梁代の創建、北宋期の再建）も「六榕塔」と呼ばれた。

この塔は、八角形の花の柱を思わせたところから、「花塔」の通称を持つ（高さ五十七メートル）。南宋の方信孺は、「淨慧寺の千仏塔（花塔のこと）」詩のなかで、珠江の船上から眺めた仏塔の偉觀を、こう歌った、「常に識る 嶼峒として（高々とそそりたつて）雲外に浮かぶを」と。

南越国の古都廣州は、南海貿易で繁栄した、嶺南の行政・軍事の中心である。亜熱帯特有の風土を持ちながら、海外の珍しい文物にも触れえる、不思議な都市であった。清の王士禛は、この特異な風土に接した驚きを、こう歌う、「洋船より新たに買ひし紅き鸚鵡は、却つて苦しむ 羊城（廣州） 特地に（ひどく）寒きを」と（『廣州竹枝』の二）と。詩跡廣州のもつ、別の側面である。

### 註

- (1) 吳隱之「酌貪泉賦詩」古人云此水、一飲懷千金。試使夷齊飲、終当不易心。
- (2) 李群玉「石門戍」詠詠貪泉四句詩（全唐詩五七〇）
- (3) 江総「秋日登廣州城南樓」秋城韻晚笛、危樹引清風（先秦漢魏晉南北朝詩・陳詩八）



(4) 全唐詩三四四。

(5) 宋之問「登粵王台」地濕煙嘗起、山晴雨半來(全唐詩五三)

(6) 許渾「冬日登越王台懷歸」海辺花盛越王台(全唐詩五三三)

(7) 沈元滄「登鎮海樓」沙洲漠漠波濤靜、瓦屋鱗鱗煙火稠(歷代名人

入粵詩選「黃雨、広東人民出版社、一九八〇年」三八〇頁)

(8) 李群玉「登蒲澗寺後二巖」五仙騎五羊、何代降茲鄉(三體詩)

(9) 皮日休「送李明府之任南海」五羊城在巖樓辺(全唐詩六一四)

(10) 劉言史「広州王園寺伏日即事、寄北中親友」誰憐在炎客、一夕壯

容銷(全唐詩四六八)

(11) 方信孺「淨慧寺千仏塔」常識嶼雲外浮(歷代名人入粵詩選二六

六頁)

洋山人精華録九)

### (31) 羅浮山(広東省)

惠州市の西北、博羅・增城・竜門の三県にまたがり、「峨眉(四

川の名山)は高く西極(西の極)の天に出で(そそりたち)、羅浮

は直に南溟(南海)と連なる」李白「当塗県(安徽省)の趙炎少府の粉

図(粉い壁に描いた色彩画)山水の歌」と歌われる南粵(広東・

広西)の名山である(長さ二五〇キロ、四三三の峰々(八〇〇メ

ートル前後)からなり、主峰の「飛雲頂」は二二八二メートル)。

山中は飛瀑や泉、豊富な薬草にめぐまれ、『抱朴子』の著者とし

て有名な東晋の道士葛洪が、煉丹と著述にはげんだ霊山でもあ

る。東麓の道教の寺院、冲虚古(観)は、その跡の一つとされる。

そもそも羅浮山は、羅山と浮山の総称ともいう。浮山とは、東

海の仙島「蓬萊山」中の一つの阜が、海に浮かびただよつて、羅

山のそばに來たという伝承(『元和郡県図志』卷三十四、循州博羅

県)をもつ神山であつた。「謫仙人」李白が、山中に隠棲したいと

願つたところでもある(『王昌齡と同一族弟の裏』桂陽に帰るを

送る「二首その一」)。

羅浮山は梅花の名所でもある。隋の趙師雄は、山中で一人の若

い娘と出会つた。彼女と語ると、芳香がただよい、言葉も清らか

に美しい。彼は一緒に酒を飲んで酔い、目がさめると、大きな梅

の樹の下にいた。彼女は梅の花の精(仙女)だったのである(柳

宗元の作とされる『竜城録』卷上)。

これ以降、「羅浮の夢」は、梅花を詠む典故の一つとなる。中唐

の殷堯藩「友人の山中の梅花」詩にいう、「好風吹き醒ます 羅

浮の夢、聴く莫かれ 空林(人けのない林) 翠羽(翠の鳥)の声

を」と。

羅浮山の詩跡化に大きな役割を果たしたのは、北宋の蘇軾が紹

聖三年(一〇九六)、惠州流罪中に作つた「食荔枝」(荔枝を食ら

ふ)詩二首その二である)。

羅浮山下四時春 羅浮山下 四時春なり

盧橘楊梅次第新 盧橘 楊梅 次第に新たなり

日啖荔枝三百顆 日び荔枝を啖らふこと 三百顆

不辭長作嶺南人 辭せず 長く嶺南の人と作るを

ここ羅浮山のふもと(惠州)は、一年中、おだやかな春の陽気。

盧橘(一説に、きんかん)、楊梅など、つきつきと新しい果物が採

れる。毎日、こんなにおいしい荔枝を三百個も食べられるなら、

嶺南に永住してもかまわないのだ。

嶺南は今の広東・広西を指し、歴代の流刑地である。荔枝は「南中(南国)の珍果」とされ、楊貴妃の大好物であった。詩は、逆境に強い作者らしいユーモアにあふれている(六十一歳)。

広東省の名勝「羅浮山」は、南の境界(南蛮)に位置したため、その詩跡化はやや遅い。それでも北宋の祖無斂は、山と別れる名残り惜しさを、「こつ歌った、我、羅浮に到りて、看れども足らず、山を下らんとして、還ほ解す、肩輿を倒にするを(肩輿の向きを逆にして、下りながら山の姿を賞でる手だてを)」、「羅浮山の行」と。

### 註

- (1) 殷堯藩「友人山中梅花」好風吹醒羅浮夢、莫聽空林翠羽声(全唐詩四九二)
- (2) 蘇軾詩集四〇
- (3) 祖無斂「羅浮山行」我到羅浮看不足、下山還解倒肩輿(歷代名人入粵詩選一三四頁)

### (32) 滇池(雲南省)

雲南省の省都、昆明市の西南郊外に横たわる、約三〇〇平方キロ(南北約四十キロ、東西の平均約十キロ)の湖の名。古くは『史記』卷一一六、西南夷列伝のなかに見え、「方三百里(三百里四方)と記される。別名は「滇池沢」「昆明池」「昆明湖」。昆明も滇も、ともにこの地域に住んだ部族の名である。

昆明市は、標高約一九〇〇メートルの高原にあって、酷暑もなく、年中、花の咲き乱れる別天地であるところから、「春

城(春の城)と呼ばれる。とりわけ残雪のなかに紅く燃えたつ山茶花は、雲南を代表する花であり、「冷艶」な美しさで知られた(清の担当「山茶花」詩)。

中国の西南の境界「雲南」は、元来、さまざまな少数民族が峻険な地勢に割拠した「蛮地」であった。唐代には南詔国、宋代には大理国が、独立王国を築いた。元朝の制圧以降、雲南は中央の支配下に入り、漢族が移住して、急速に漢化が進んだ。ただ当地は、明・清朝を通じて、配流の地でもあった。

雲南の雄麗な山河や、境界特有の風物をまとまつた形で紹介したのは、明の嘉靖三年(一五二四)、三十七歳のとき、世宗の逆鱗に触れて左遷され、以後、赦免されることなく、約三十五年間、当地に住んで没した楊慎である。彼は、この雲南で心の慰めを詩と酒に見いだし、余暇には著述に専念した。彼の「滇海曲十二首」

(滇海は滇池の別名)は、「滇海竹枝詞二首」などとともに、滇池周辺の風土や民情を歌った代表作である。その中の一首、

蘋香波暖泛雲津 蘋香しく波暖かにして 雲津に泛へば  
漁樵樵歌曲水濱 漁樵樵歌す 曲水の浜  
天氣常如二三月 天氣は常に二三月の如く

花枝不断四時春 花枝断えずして 四時春なり

雲津橋から乗船して湖面に浮かべば、浮き草が芳しくにおい、波も暖か。入りくんだ水辺には、漁師が柁を鳴らして舟をこぐ音や、木こりの歌声がひびきあふ。天候はいつも三月(仲春・晩春)のよう。枝先には、花が絶えることなく、一年中、春の気はいと。

じつは、明初、当地に配流された日本の僧、機先も、月夜の舟



遊びを歌った清麗な七言律詩「滇池の夜月」を残す。「白月（輝く月）人に随ひて 相ひ上下し、青天 水に在りて（映つて）与に沈浮す」と。そして夜、赤壁に遊んだ蘇軾のことを思い浮かべ、しばし配流の憂さを忘れて詩作に没頭した、と。

しかし、僻遠の滇池が詩跡として認定されたのは、やはりすでに述べた明代の著名な字者・詩人である楊慎の功績である、といつてよい。

現在、北岸の三層の大観楼（清代創建）や、西岸にそそりたつ西山は、一望のもとに滇池を見おろす名所として知られる。昆明市文化局編注『歴代詩人詠昆明』（雲南人民出版社、一九八二年）は、有用な参考書である。

#### 註

- (1) 楊慎詩選（王文才、四川人民出版社、一九八一年）一六六頁。
- (2) 機先「滇池夜月」白月随人相上下、青天在水与沈浮（歴代詩人詠昆明三十一頁）

#### 〔追記〕

本稿は、本年、大修館書店から刊行予定の松浦友久編著『漢詩の事典』（宇野直人・松原朗・植木久行共著）の主要部の一つ、「名詩のふるさと（詩跡）」の章に載せるために執筆した文章である。しかし当初予定した枚数を大幅に超過したため、一部掲載できなくなり、ここに紀要の紙面を借りて発表する。この割愛部分にも、捨てるには惜しい指摘が多く含まれている、と判断されるからである。

なお典拠は、『漢詩の事典』の体例にほぼ従って、通行のテキストを掲

げたが、文字（詩題や作者を含めて）は、必ずしも当該テキストに全面的に依拠しているわけではない。

一九九八年八月三十日 筆者謹識

#### 〔補記〕

前述の『漢詩の事典』は、予定よりやや遅れて、一九九九年一月十五日に刊行された。なお本稿中の「杜甫誕生室」の写真は、高木達氏から借用したもの、また「李白の住居あと？」（隴西院の中）の写真は、筆者が写したものである。高木達氏の御好意に深く感謝したい。

一九九九年一月二十日 筆者再識